

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第3部 第2章 第2節 第2 - 3項

岡 村 眞紀子  
伊 藤 博 明 訳

第2章 第2節 第2項  
愛の憂鬱症の他の原因、  
容姿、顔の美、眼、その他の部分、  
それがいかに刺し入るか。

その他の原因は数多く数え上げることができようが、時や場を得ずしては、また、その他の美しいものや、意図的な誘惑、たとえば接吻、逢瀬、会話、仕草が、同じような官能的な刺激とともに働かずしては、効果を発揮することはできない。コルンマンは『愛の糸』で、おそらくルキアノス [『愛する者たちの対話』第4巻] に基づき、愛欲の五段階を挙げ、次の5章に分けて論じている。

視覚、会話、会食、接吻、接触。

ときには語ることや聞くことが先行したり、煽り立てたりすることはあるというものの、これら五つのうち、視覚が、制御不可能な愛への最初の一步である。というのも、至極簡単に恋に陥りやすい人がいて、立派な男性あるいは女性の声を聞けば、見る前に愛してしまったり、アキッレウス・タティオスが指摘しているように、ただ噂を聞いただけで恋してしまったりするからである。「あまりの放縦と淫欲ゆえに、彼らは風評を耳にただけで、まるで自分が目撃したかのように、すっかり骨抜きにされてしまうほどのものである。ビザンツの若い金持ちの男カリステネスは、トラキアでソストラトゥスの美しい娘レウキッペについての噂を耳にし、すっかり恋に落ちてしまった。そして評判と世の噂だけで燃え上がり、どうしても妻にせねばと思ひ詰めた」〈『クレイトポンとレウキッペの恋の話』〉。時には、ルキアノスが自分自身について語っているように、その人について読んだだけで恋に落ちる。「私はクセノポンのパンテアの場面を読むと必ず、まるで彼女のそばにいるかのように心乱れた」 [『絵画論』]。こういう人たちは、たいてい自分勝手に美女を創り上げているのであって、バルダッサレー・カスティリオーネでも、

かの三人の女性たちは、褒められているのを耳にただけでまったく見知らぬ一人の若者への恋に落ちる〔『宮廷人』第2巻〕。あるいはまた、手紙を読んで恋に落ちることもある、というのも聴覚から届く美点もあり、それについては道德哲学者〔ピッコローミニ〕が次のように我々に教示している、「視覚からと同様、創られることによって、愛の諸形象が表象へともたらされる」〔『疾病普遍哲学』第8巻第38章〕。「欲することが視覚からであるように、求めることは聴覚から」〔リブシウス『書簡集』第2部第22書簡「ベルガイ人へ」〕というように、両方の感覚が働く。「時には、眼の前にいない人を愛することもある」とピロストラトスは〔『書簡集』の中で〕言い、一度もあったことのない、眼ではなく心で見たコリント人の娘を愛した友人アテノドロスの例を挙げている。知性の眼で見ることでもあるのである。

とはいえ、最もよくある一般的な愛の原因は、視覚を通して入ってくるものである。視覚は美や心嬉しい美質の素晴らしい光線を心に運んでくれるからである。プロティノスは愛を視覚由来のものとし、「愛は視覚のようなもの」〔『エネアデス』3.5.3〕と言う。

あなたが知らないとしても、眼が愛の導き手になってくれる。

〔プロペルティウス〈『詩集』2.15.12〕〕

眼は愛の先駆け、愛の最初の一步は視覚であり、このことについては、ジリオ・グレゴリオ・ジラルディが『異教の神々について』第13章で詳細に証している。かの神々しく強力で魂を奪い捕えてしまう美の影響の許、眼は、二つの水門のような働きをする。このような美は、アキッレウス・タティオスが言うように、「どんな矢や針より鋭く、心を奥深くまで傷つけ、眼を通して、魂そのものに突き刺さるあの愛しい傷へと通じる道筋を作る」〔〈クレイトボンとレウキッペの恋の話〉第1巻〕。また「視覚を通して愛が火のように燃え上がる」〔『集会の書』9.8〕。イソクラテス曰く、この驚くべき、困惑を招くようで、素晴らしく、愛すべき美は、いかなる自然の宝をもってしても、これほど荘重で聖なるものではなく、これほど神々しく魅力的で貴重なものはない〔「ヘレネ讚」54〕。この美は、自然の黄金に輝き栄光に満ちた王冠、最高の中でも至上の善きものでないにしても、それに優ることも稀ではない〔クリストバル・フォンセカ『愛の円形闘技場』42〕。それゆえ、その力は認められよう。我々は概して、見た目に美しくないものを侮蔑し、嫌悪し、それらを汚らしいと考え、美しいものを愛し求める。あらゆるものの中で、私たちを愉ませ誘うのは美、たとえば美しい鷹、繊細な衣服、立派な建物、奇麗な家などである。かのバルシアのクセルクセス王は、ギリシアでありとあらゆる神殿を破壊したとき、ディアナの神殿だけは、その際立った美しさと壮麗さゆえに、宥赦して完全に残した。生命のない美すら、そう要請することがありうるのだ。プラトン〈の『饗宴』〉で医者のエリュクシマコスが主張するように、それこそが、画家、技工、弁論家、誰もが目指すものである〔ルキアノスに拠る〕。「芸術に機会を与え、彫刻、絵画、建築の知を見出す、すなわちモデル、背景、豊かな調度、その他稀なる創意を見出すのは、何よりも美であった」〔ブオーニ『美の諸問題』〕。百合の白、薔薇の赤、堇の紫、それ

に生命のないあらゆるものにある輝き、たとえば、月の明澄なる光、太陽の輝く光線、黄金の光輝、純粋な大理石、光り輝く金剛石、それに馬の類い稀な資質、獅子の威厳、鳥のさまざまな色彩、孔雀の尾、魚の銀色の鱗、これらを我々はこの上ない歓びと驚きとで見ろ。そして「植物において豊か、花において心愉しく、獣において驚異的、しかし、人において何にもまして栄光あるもの」〔ブオーニ『同書』第11問題「形態について」〕は、我々に刺激を与え、熱心に求めさせる。我々が甘美な調和なす調べや雄弁な言葉を耳にしたとき、卓越した資質や人の手になる珍しい作品、手の込んだ技、あるいは妙なる何かを眼にしたとき、たちまちにして同じものを求める気持ちが沸き起こるのである（ブオーニ『同書』）。我々はそういう人たちを愛でる、しかし、大抵のところその見目好きで愛でているのであって、神々しく、晴朗、幸せな、神々とか女神たちとか呼んでいる。カルカニーニ〔「誹謗中傷について」〕によれば、人間のうち、そういう見目麗しき者だけは誹謗中傷を免れる。彼らは富、威信、栄光によって花咲き、我々は傷ついて憤慨する。我々は、有名で豊かで幸せな人たちを中傷し、名誉を傷つけ、嫌悪し、彼らの幸を託つ。彼らは価値なし、財産は我々には継母、彼らには生みの親と考える。イソクラテスの言葉では、「互いに役に立ったり、親切にしたり、善きことをするといい愛を我々に強要しない限り、我々は賢明な、公正な、正直な人々を羨む。しかし我々は美しい人だというだけで一目で愛し、知己になりたいと願ひ、多くの神々に対するがごとく崇める。他の人たちに命じるよりは彼らに仕えたいと思い、憧れる人を見つめ、さらなる奉仕を彼らが喜んでくれることを願う」（『ヘレネ讚』）。その他の点では彼らが酷く不誠実であったとしてもである。彼らに他に何の取り柄がなかったとしても、我々は彼らを愛し、与し、彼らの美のためなら喜んで何でもする。「語れ、おお、美しい青年よ、語れ、アウティロクウスよ、汝はネクタルより甘美に語られる。語れ、おおテレマコスよ、汝はオデュッセウスより激烈に語る。語れ、アルキビアデスよ、いかに酔っぱらっていても。我々は、酔っぱらった汝にでも喜んで耳を傾けるであろう」と、ストパイオスの〈『説教集』〉において、かの能弁なファウオリヌスが声を挙げる。彼のような過ちは過ちではない。というのも、先に述べたアルキビアデスがアニュトスから金銀の皿を盗んだとき、そのように邪な行為が訴追されるべきことなどと思ってもいず（誰もが彼の罔々しさや傲慢さを責めはしたが）、自分の甘美なる満足のために（アルキビアデスは自己愛がとても強かったのだ）、もっとたくさん、もっと良いものが欲しかったと思った。そのように美しい人にとって、どの価値が抜きんでているということはなく、不完全さはすべて隠されてしまう。我々が最も褒める人たちについては、そう簡単に、その醜悪さを疑うことはない。というのも、聴覚、視覚、触覚、我々の心もすべての感覚も捕らわれ、美しいものがすべての感覚を惹きつけてしまう。多くの人は、ただその人物ゆえに拔擢される、たとえば王に選ばれるとき、インド人、ペルシア人、エチオピア人の間で昔からそうであったように、その国が輩出しうる限りの最適の人物が主君として選ばれたのであるが、美しい身体からくる美德はより好まれる（ウェルギリウス『アエネイス』5. 344）からである。他の多くの国々も同様に「確かに、身体における威厳は、大いに崇敬される」（クルティウス〈『アレクサンドロス大王の事績』第5巻〉）と考え、おこなった。そのように美しい人には威厳のある風采が備わり、美

は大いに崇められたので、美も含めあらゆる面で優れていて卓越しているのではない人が統治者にふさわしいと考えられることはなかった。スパルタ王アギスは小さな女を娶ったゆえに、彼らが国事を衰退させないわけではないと、廃位されそうになった。英国の修道士の庶子で、(パピール・マソンが『ローマ教皇たちの伝記』で) 書いているように) 両親から見捨てられた、無力で不潔で貧しい子どもが、ハドリアヌス4世としてローマ教皇になるに至るとは、誰が考えたであろうか。しかし、なぜだったのか。彼は才知に鋭く、能弁に勝り、体つきは優雅で、顔つきは快活で喜びに満ち、(マソンはニューバラのウィリアム[〈『イングランドの事績』〉第2巻第6章]に拠っているのだが——というのは、彼は彼の雌牛とともに耕すのだから〈『士師記』14,18〉)、優れて端正な男で、一言でいえば、彼ならではの魅力的な顔貌をもち、しかもそれをもち続けたがゆえに、めざましい栄達を遂げたのである。同様に、サウルは美しい人物だったのであり〈『サムエル記上』9.2〉、綺麗なマクシムスは皇帝に選出された、等々。(ラクタンティウスが語るには)、アポロンがスクロンの娘であるヤンキスに産ませた息子ブランクスは、テッサリアでアドメトゥス王の牛の群れを見張っていたが、成人すると自分の父が誰なのかを知ろうとして母にたいそう熱心に嘆願した。このニンプは彼にそれを拒否したが、というのも、アポロンが彼女に逆のことを説き伏せていたからである。しかし、最後には、彼の執拗さに負けて、彼女は彼を父のところに送った。彼はアポロンの面前に出ると、この神の両頬にうやうやしく接吻し、まったく申し分なく振る舞い、またきわめて美しい青年だったので、アポロンはこの人物の美しさに甚だしく魅了されて、彼からほとんど眼を離すことができず、そして、彼こそはこのような両親に相応しいと述べて、彼に黄金の冠と予言の能力を授け、結局、彼を半神にした。「おお、美の尊大な力よ」[チェリオ・セコンド・クリオーネ『接吻』8]、女神の美は、神々もその美しいさまを愛するほどで、彼女は愛の女主人、愛の先駆け、愛の磁石、魔女、呪力、等々である。ルキアノス[『愛する者たちの対話』]、アプレイウス[『魔術論』2]、ティラクオ[『婚姻法について』第2巻第27章]、そして他の幾人かが推断しているように、美はそれ自体、婚資であり、十分な財産であり、豊かな褒賞であり、精確な書簡である。トスタード・リベロが『五つのパラドクス』第2章101で述べているように、「美は帝国に値する」。そして、不滅性に値する。「彼女は、他のあらゆる徳よりも、自らの美のゆえに、この名誉と永遠性を獲得した」(イソクラテス〈「ヘレネ讚」60〉)。このように美しい者たちは、「神と人々から称讃されるに値する」([ルキアノス『カリデモス』4])。それゆえ、イダ山のガニュメデスはユピテルによって天上へと連れ去られたのであり、ヘパエステイオンはアレクサンドロスの、アンティヌスはハドリアヌスのお気に入りであった。この理由のために、プラトンは美を自然の特権、歓喜する自然の業、自然の傑作〈プラトン『饗宴』210-11〉、プブリリウス・シュルスは物言わぬ評言〈『格言集』169〉と呼び、テオプラストス・ラエルティオスは沈黙する欺瞞〈ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』5.19〉、カルネアデスは言論なしに説得するがゆえに静かな弁論術、すなわち美しい人々が司令官のように命じるがゆえに監視なしの王国と呼んでいる。ソクラテスは僭主たち自身を支配する僭主と呼び〈プラトン『国家』9.573B〉、それゆえにシノペのディオゲネス〈『哲学者列伝』6.63〉はおそらく、端正な

女たちを、男たちが彼女たちの命令に従順であったがゆえに女王と呼ぶのである（『哲学者列伝』6. 63）。彼らはありふれた娘を（もし彼女が美しければ）、あたかも彼女が高貴な女性、伯爵夫人、女王、あるいは女神であるかのように、讃え、諂い、褒め、彼女にひれ伏すのである。ギリシアのあの不埒な若者たちはデルポイに、遊女のフリユネを永遠に記憶に留めるために、膨大な費用をかけて黄金の像を建立した。というのは、（アイリアノス『様々な物語』第9巻）が伝えているように）彼女はこの上もなく美しい女だったからであり、アテナイオス（『食卓の賢人たち』13. 591A）が述べているところでは、彼女はこの上もなく美しかったので、アペレスとプラクシテレスは彼女に拠ってウェヌスの絵画を描いたのである。このように若者たちは、美を崇めて讃えるだろう。それどころか——と私は言うが——王たち自身もそうするだろう。そして自らの統治権を愛らしい女に進んで委ねるだろう「葡萄酒は強く、王たちは強いが、しかし女は最も強い」（『第一エズラ書』3.10）。このことは、ソロバベルがダリウス王、彼の諸公と貴族たちに詳しく証している。「王たちは静かに座り、海と陸に命じる、等々。あらゆる者たちは王に貢ぎ物を差し出すが、女たちは王たちに貢ぎ物を差し出させ、王たちを支配する。王たちが金と銀を得たときは、すべてを美しい女に与え、彼女にすっかり身を委ね、口を開けて、彼女に見とれる。そして、あらゆる男は彼女を、金や銀、その他の貴重なものにも増して欲する。彼らは父と母のもとを離れ、彼女のために生命を危険にさらし、彼女を得るために苦勞して旅し、そして、自ら得たあらゆるものを女たちにもたらし、自らの女主人のために盗み、闘い、身をもち崩すだろう。いかなる王といえども、美しい女が彼よりも強いことがないような、それほど強い者はいない。（彼が続けているように）『第一エズラ記』4. 29）あらゆるものは王に触れることを恐れるが、しかし私は、王と、有名なバルタクの娘で王の側室であるアパメが彼の右側に座っているところを見た。彼女は彼の頭から王冠を取って、それを自分の頭に載せた。そして左手で彼をぶったが、王は口を開けて彼女に見とれていた。彼女が笑うと彼も笑い、彼女が怒ると、彼は彼女に赦しを請うために諂った」。このように、美は王たち自身さえにも命じる。それどころか、軍隊と王国全体が自らの王たちとともに虜になる。「美は軍人たちに打ち勝ち、美は武器を捕らえ、戦闘で打ち負かされないような者たちも打ち負かされるだろう」〔オリゲネス『民数記』注釈〕23〕。そして、これがクセノポン（『饗宴』4.13）の述べている注目すべき事柄である。それについて、「あらゆる美しい人物が然るべく誇ってもよいのは、強い男は、もし必要とあれば、自らの生活のために働かねばならず、雄々しい男は闘い、自らを危険にさらさなければならず、賢人は語り、自らを見せびらかし、苦勞しなければならぬが、魅力的で美しい人物はこれらすべてを容易におこない、なんの苦勞もなしに自らの欲望を成し遂げるからである」。すなわち、神と人々、天と地は、気脈を通じて彼に名誉を与え、あらゆる者は、もし彼が困窮すれば、彼に特段の憐れみをかけ、そして全世界は彼に善を施すのを喜びとする（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』5. 15）。カリクレアは海賊たちの手に落ちたが、他のすべての者が剣の刃にかけられたとき、彼女だけがその容姿ゆえに救われた〔ヘリオドロス（『エチオピア物語』第1巻）〕。コンスタンティノーブルがトルコ人によって掠奪されたとき、イレネは逃れて、捕虜にされるどころ



か、偉大なスルタン自身を虜にした [ノールズ『トルコ人の全般的歴史』]。このようにして、ロズマンドは国王ヘンリ2世に勝利した。

私は美しい臣下であったが、  
運命がわが王とした方を、わが愛は臣下とした。  
義務をすべて帳消しにする力をもつ  
美の特権に、王は、証を前にして気づいた。

[サミュエル・ダニエル「ロザモンドの嘆き」]

それはまさに神々自身を、気難しい神々を虜にする。

神々の中の神自身が、  
この美のために牛、馬、雨、白鳥になる。

[ストロツィ『エピグラム集』]

そして、これらの悪しき霊たちも、私がすでに示したように、それに囚われる。「夷狄たちは美しい女を畏敬し、そして、凶暴な心は美しい容貌を見て穏やかになる」（ヘリオドロス〈『エティオピア物語』第5巻〉）。というのは、トロイが征服され、戦争が終わると（アレクサンドリアのクレメンス『『雑録』第2巻〈20. 107〉』がエウリピデスから引用しているように）、怒りに満ちたメネラオスは悲憤慷慨によって武装し、自らの剣を引き抜いて、これらの戦闘と悲惨さすべての唯一の原因である、ヘレネを自らの手によって殺めようとしてやって来たが、彼女の美しい顔を見るや、彼女の神々しい美に驚嘆して、自らの武器を落とし、それどころか彼女をかき抱き、このように甘美な被造物を突き刺す力を無くしてしまったからである。（諺にあるように）「それゆえ、剣の刃は美しさによって鈍る」。そして、厳格さ自体が打ち負かされる。弁論家のヒュペレイデスは、アテナイで彼の顧客のフリユネが淫奔の罪で訴えられたとき、彼女への訴訟の弁護をするためにおこなったのは、彼女の上着を引き裂き、彼女の胸を裁判官たちに対して露わにただけだったが、彼女の身体の端正さと愛すべき仕草によって、彼らはたいそう動揺し、驚嘆したので、ただちに彼女を無罪にして、そこから立ち去らせた（アテナイオス『食卓の賢人たち』）。ああ、何と高貴な裁判官であることか、と本書の著者は讃歎している。至上の美に対して有罪を言い渡すくらいなら、法席とガウンを失い職を剥奪される方を選ぼう、としない者などいるだろうか。そのような特権は美しい人のもので、美しい人だけが危険を回避できる。パルテノパイオスはいとも美しく麗しく、テーバイ戦役で戦った際、もし彼の顔がたまたま覆われていなかったとすれば、敵は誰も彼に一撃を与えることはなく傷つけることもなかったであろう。そのような特免を美は手にしているのである。獣も美しさには心打たれる。シナルダは女王でとても美しい女性であったので、荒馬に踏みつけられる刑罰に処されたとき、「荒馬たちは彼女に驚異を抱き

立ち止まり、彼女を傷つけることはなかった」(サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』第8巻)。アプレイウス〈『変身物語』6. 28-29)の処女王女は、盗人たちの洞窟から逃げ出したとき、砂漠で、なぜ急に驢馬に呼びかけ、それに乗ったのか。(逆に、なぜ、「それがただの驢馬でない」と知ったのか。)[もし、お前が私をお父様お母様のところ、愛する人のところに連れ戻してくれるなら、お前にどんなに感謝するでしょう、どんなにお前を讃えるでしょう、どんなに美味しいものをお前に食べさせるでしょう]と、毎日彼女は手ずから、その驢馬を梳り、馬具を付け、食べ物を与え、飾り立てたものだった。驢馬は、もはや働くことも汗水流すことも必要なく、休息し、遊び暮らせばよかった。そればかりか、彼女は未来永劫記憶に残るようと、娘が驢馬の背に乗っている美しい絵を、「驢馬に乗って捕らわれの身から逃げる処女王女」のモットーとともに描かせた。どうして彼女はこんなことをしたのか、どうして彼女は物言わぬ獣にあのような約束をしたのか、この貧相な驢馬が彼女の美しさに魅せられると気づかなかったとしたら。というのも驢馬は、王女が乗るたびに、しばしば首を傾け、娘の足に接吻しようとしたし、その美しい囁くような声にあわせて嘶こうとし、さらに、惨めな状況に彼女が抱いていたのと同じような思いを感じていたからである。ヘリオドロス [『エチオピア物語』第3巻〈3〉]のテアゲネスの馬は、何ゆえに、高らかに嘶き、闊歩し、誇り高く歩みを進めたのか。本書の著者が鑑みるように、間違いなくご主人に恋をしていたからである。自ら見目麗しい馬は主人の美しさを解っていたと、あなたも仰ったことでしょう。マルティウスが眠っていたとき、一匹の蠅がその頬に留まった。なぜか。彼の食客が間近でしかと見たように、彼を傷つけるためではなく、接吻するため、彼の神々しいまでの美形に心奪われてのことであった。私が思うに、恋に落ちた者には覚えがあるでしょう。プシュケの持つ蠟燭の一滴がクピドの肩に落ちたとき、その一滴は彼の肩に接吻をしようとしたのだと私は確信している。わが国の風雅な詩人 [シェイクスピア] が、ウェヌスを描いたように、ウェヌスが薔薇の頬のアドニスにまみえようと走った時、

—— 行く道の灌木が

あるものは彼女の項を捕まえ、あるものは彼女の顔に接吻し、

あるものは彼女の脚に巻きついてその歩みを止めようとし、

皆こぞって彼女に抱きしめてほしいと願った。

〈『ヴィーナスとアドニス』 871-74〉

「空気ですら恋に陥る」とヘリオドロスは言う (『エチオピア物語』 3. 7)。というのも、ヘロが豎琴を奏でたとき、

奔放な空気は二十もの姿になって踊った

彼女の指を追って。

[マーロウ〈チャプマンが引き継いで〉『ヒアロウとレアンド』 5. 44-45]

ダブネがアポロンから逃げたとき、彼女をとどめたのは、そんな淫奔な風であった。

—— 風がダブネの身体を露わにし  
向かい風が衣服を翻した。

[オウィディウス『変身物語』第1巻〈527-28〉]

<sup>ボレアス</sup>北風はヒュアキントスに恋し、またアテナイ王エレクトニオスの娘オレイテュアにも恋し、彼女が他の娘たちとイリソス川で遊んでいるときに力づくで連れ去り、ゼテスとカライスの二人の息子をなした。海も川もこのわれらが美女へロに恋したというのは、空気や風が恋に落ちたのと変わらず良くある話である。というのもレアンドロスがヘレスポントス海峡を泳ぎ渡ったとき、ポセイドンが三叉矛を使って波を叩き諫めたが、

なおも波は、彼に接吻したとでも言いたげに高く逆巻き、  
遂げられなかったがゆえに、千々に碎け落ちた。

〈マーロウ『ヒアロウとレアンダ』2. 173-74〉

アルペイオス川はアレットゥーサに恋をした。彼女が独り言つには、

—— 緑の髪を手で拭い乾かして、彼女は  
アルペイオスの川の古の愛を口にした  
私はニンブの一人だった……。

[オウィディウス『変身物語』第5巻〈575-77〉]

わが国のテムズとアイシスが出会うときには、

千の口づけの音が聞こえ、彼らの腕は絡みあって青さを増し、  
ぐっと腕を伸ばして互いの項を抱き合う。

[リーランド『白鳥の歌』〈おそらく誤り〉]

それにイナコスとピネオス、他にも、美が虜にした、愛し合う川を私はいくらでも挙げるができる。この種の偶像崇拜を犯した偶像たる貴婦人たちについては、なおも何をか言わんや。（詩人たちを信じるなら）侍女たちが貴婦人を着飾りつつ、両者して鏡を眺めては恋に陥るという偶像崇拜のことを言っているのだが。



たとえ私に感覚がなくとも、あなたの魅力が私に感覚を  
もたせ、私は熱い愛をずっしりと身に感じる、  
あなたは、なんと繁く、じっと見つめる眼の光をこちらに向け、炎が  
なすすべなき傷ついた私の手足を燃やすことか。

[アンゲリアーノ 〈『天と鏡について』〉]

アンゲリアーノの話では、美しい女性の面立ちに燃え立つ思いを抱いた鍾の話をもう一つ挙げる  
ことができる 〈「カエリアの浴場」〉。思いを寄せたのは指にだという人もあり、どちらが正しい  
かは良く知らないが、ものの話によれば鍾が燃えたという。また冷たい浴場が、カエリアが裸身  
で入ってきたときに、突然湯気で煙ってとても熱くなったといった話もある。

この溢れる湯気が何なのか、どこから来るのかと、我々は驚いた。

[〈「カエリアの炎」〉]

しかし、この種の物語の中で最も記憶に残るのは死についての話で、死が若い娘をその矢で射た  
とき、死に追いやる相手に恋をしたというものである 〈「我と死とクピド」〉。このような話は、  
詩的眞実があると考えられる同様の話は他にもある。言葉を話さず死んでも同然の動物は愛に溺  
れるが、人は美女を一目見たとたん眼を見張り、幾重にも狂い正気を失う。独り海辺で水浴び  
をしている娘を覗き見た漁師のように、

頭から足先まで私の手足はすっかり  
弛緩してしまい、感覚がすべて胸から消えうせた。  
かくして大いなる麻痺が、わが魂に入り込んできたのだった。

[ストバエオス 〈『説教集』 63〉]

またルキアノスが『絵画論』で自らについて告白しているように、彼は恋人の面前では全く感覚  
を失くしてしまい、あたかもゴルゴンの顔を見てしまったかのように動くこともできなくなった。  
彼女は、まったくもってそんな残虐な怪物などではなく、「美の極み」(ロドヴィコ・チェリオ・リッ  
キエーリ 〈『古の教え』〉 第3巻第9章 〈正しくは24.9)〉)、相当な美形、間違いなく、詩人なら  
まず詩に描きたいと思うもの、眼にする者は誰もが驚嘆したものだ。「あなたが輝きを差し  
向ける哀れな男は」[ホラティウス『オード集』〈1.〉 5. 〈12-13〉] 彼女の魅する顔を見れば狂い、  
生命を絶ってしまうほかないのだ。

彼らは、彼女の蔑む眼による宣告を待つ。  
そして、彼女が好意を抱く者たちは生き、他の者たちは死ぬ。

[マーロウ『ヒアロウとレアンダ』〈1. 123-124〉]

ヘリオドロスが〈『エチオピア物語』〉第1巻〈20〉において示しているように、トゥアミスが初めてカリクレイアを見たとき、ほとんど茫然自失となり、そして再び彼女を見つめようとはしなかった。「というのは、男にとって、彼女を見て、しかも自制しながら生を送るのは不可能である、と彼は考えたからである」。彼女の美の名声こそが、何マイルも離れたところから彼らを魅了し（このような吸引力を、この磁石はもっている）、彼らにはこの距離も短いものと見えるだろうし、彼らは労苦も苦難も厭わず、海洋、砂漠、山脈、危険な場所を通る長旅を企てるのであり、ペニエアもアタランタも彼らを追い越すことができないだろう——彼らがプシュケを眺めるためにおこなったのと同様である。「多くの男たちがあちらこちらから、当時の榮譽に満ちた対象を見るためにやって来た〔アプレイウス〈『変身物語』〉4〈29〉〕。パリスはヘレネのゆえに、またコエロプスもトロイアにやって来た」。

—— 彼はつい先頃、トロイアへ来た、  
カサンドラへの狂おしい愛によって火をつけられて。

〈ウェルギリウス『アエネイス』2. 342-43〉

フランス王ジャンはかつてイングランドで獄に繋がれていたのだが、旧友たちを尋ねようと、再び海峡を渡ってやって来た。しかし真実を言えば、彼の来訪は、当時の「比類のない」、彼の愛しい女のソールズベリー伯爵夫人を会うためだった。あの冥界の王プルトゥスは、冥界から自ら進んで、プロセルピナを拐かすために出てきた。アキレウスは、敵の娘であるポリュクセネのために、自分の友人たちすべてを置き去りにした。そして、すべてのギリシアの神々は、当時のギリシアの模範であった、ピロン・ディオネオスの娘の美しい女性のために、天上の館から立ち去った。「彼女はとても美しかったがゆえに、すべての神々は、競って彼女と結ばれることを期待した」〔ニコラウス・ゲルベル〈『ギリシアの知恵点描記』〉第5巻「アカイア」〕。

美しい乙女は神々に命じる

[チェリオ・セクンド・クリオーネ『接吻』]。

彼らはただ彼女を見に来るのではなく、鷹匠が飢えた鷹を空中に放つように、追い求め、付き従い、もてなし、彼女を手に入れるために財産、生命、そしてすべての幸運を費やす。

もし美に二十の鍵をしっかりとかけたとしても、  
愛はそれらを貫ぬき、最後には、すべての鍵を開けるだろう。

〈シェイクスピア『ヴィーナスとアドニス』575-76〉

美しいヘロが外出したとき、彼女を見つめる者たちの眼、心、情感が彼女にいつまでも付き従った〔ムサイオス〈『ヘロとレアンドロス』71-72〕〕。

彼女は平凡な顔が並ぶ中ですべてに勝り、  
街中の人々が、女神が来る姿をじっと見つめる。

〔ホメロス〈『イリアス』3. 154ff.〕〕

他の者たちをはるかに超えて、美しいヘロは輝き、  
そして、魔法にかけられて見つめる者の心を盗み去る。

〔マーロウ〈『ヒアロウとレアング』1. 103-104〕〕

ピエトロ・アレティーノのルクレティアが最初にローマを訪れ、そして彼女の美の名声が、「この都市の享楽の信奉者たちに届き、彼女を見に来ない者はおらず」、遍く広まると、彼らは彼女を見るために「群れをなして三重になって」（と言われている）やって来て、彼女の門の辺りをうろついたが、それはかつて、コリントのライスと、テーベのプリュネに起こったことだった〔カスバル・フォン・バルト『ボルノディダスカルス』〕。

彼女の門のところに、全ギリシアが身を投げだした。

〔プロペルティウス〈『詩集』2. 6. 2〕〕

「あらゆる者が彼女の愛を得ようと試みた、ある者は華美で高価な衣裳で、ある者は気取った歩きぶりで、ある者は音楽で、ある者は豊かな贈り物で、ある者は愉快的な会話で、ある者は大勢の従者で、ある者は手紙、誓い、約束で、自分自身を推奨し、彼女の眼にとって喜ばしくあろうとした」〔カスバル・フォン・バルト『ボルノディダスカルス』〕。彼女を見ることのできた者は幸福だった、彼女に会うという喜びを得た者は三倍に幸福だった。プラトンのカルミデスは、顔立ちの美しい、礼儀正しい青年で、「あらゆる善い性質が他の者たちをはるかに凌ぎ、美しいカルミデスが外出すると、すべての者が彼に恋するように思われ（そのように、クリティアスは人々の振る舞いについて述べている）、そして彼を見ただけで騒然とし、多くの者が彼の近くにやって来て、多くの者が彼の行くところはどこでも付いて行った」〔プラトン『カルミデス』154c〕。それは、アコンティウスが外を歩くときにはいつでも、美を愛でる者たちが彼に対しておこなったことである〔アリスタエネトス『書簡集』〈1.〉10〕。アテネの娘たちはアルキビアデスを、サッポーとミティリニの女性たちは美男子のパオンをじっと見つめた〔オウィディウス『名婦の書簡』15〕。このように美しい容姿は、たんに楽しませ、誘うだけでなく、また惹き寄せ、奪うのである。繊細で優しい青年クレオニューモスは、叔父のアンドロクレスがアテネのピラエオス家

で開いた、ヘルメスに捧げた宴会において、客人たちのディネアス、アリスティッポス、アガステネスなどを驚愕させたので、(ルキアノス『遊女の対話』第4巻)のカリデモスが述べているように) 彼らは食事をとることができず、晚餐の間中、彼を見つめ、一瞥し、盗み見て、彼の美しさを讃嘆していた。多くの者は、このように夢中になる者たちを愚人として非難するだろう。しかしある者は、またそれゆえに、彼らのことを称讃する。多くの者はパリスの判断を拒絶するが、ルキアノスはそれを是認し、彼自身も同じことをおこなったであろうと、褒め讃えている。彼の心の美点によって、美は「富や知恵よりも」好まれるべきものなのである〔『カリデモス』〈10〉〕。アテナイオスは『食卓の賢人たち』第13巻第7章〈556D-E〉において、トロイア人とギリシア人が、ヘレネという、かくも美しい女性のために〔プロペルティウス〈『詩集』〉第2巻〈3. 39-40〉〕、十年間を戦い、数多くの労苦を費やし、数多くの男たちを失ったことは恥辱ではないと主張している。

そのきわめて卓越した美しさにおいて、いかなる死すべきものも  
関与しない、このような女性のゆえに。

〈ホメロス『イリアス』3. 156-58〉

その一人の女性が一つの王国の、十万の他の女性の、一つの世界自体の価値をもっていた。ステシクロスは、かくも美しい被造物を咎めたがゆえに盲目となったのだろうし、それは正しい罰だった。同じ証言をホメロスが、トロイアの老人たちについて与えている。すなわち彼らは、セイアの門で、ヘレネが臨席する中で、パリスとメネラオスの一騎打ちを眺めていたのだが、彼らはすべて、戦闘が彼女のゆえに始まり、長引くのもその価値があると語ったのである。神々自身さえも(ホメロスとイソクラテス〔『ヘレネ讃』〈52〉〕が記しているように)、ヘレネのゆえにさらに戦い、そののちに巨人族と戦った。ウェヌスが息子のクピドを失ったとき、メルクリウスに布告を出させたが、それは、クピドについての情報をもたらし得た者はウェヌスから7度の接吻を受ける、というものだった。ある者が言うように、これは高貴な報酬で、多くの金貨よりも良きものであり、多くの男たちにとって、このような7度の接吻は7つの都市や、数多くの田舎よりも貴重なものだった〔アプレイウス『変身物語』第4巻〈正しくは第6巻8章〉〕。ただ一度の接吻であっても、死なんとしている者を回復させるであろう。

こうして、軽い接吻が汝を冥界の谷から連れ戻すだろう。

〔チェリオ・セコンド・クリオーネ『接吻』13〈9〉〕

アレクサンドロス大王は、貧乏人の子であるロクサネと、ただ彼女の人の柄ゆえに結婚したが〔クルティウス〈『アレクサンドロス大王伝』〉第5巻〈正しくは第8巻4, 22-26〉〕、これはアレクサンドロスの気高い、英雄的な行爲だったのであり、私はそれゆえに彼を称讃する、オランダは

アンジェリカのために狂乱したが〈アリオスト『狂えるオルランド』〉、誰が彼の災難について悔やみを言うであろうか。ティスベはピュラモスのために〈オウィディウス『変身物語』4, 55ff〉、デイドはアエネアスのために死んだが、(回心前の)アウグスティヌスが彼女の境遇を憐れんだように、涙を流さない者がいるだろうか。彼女は彼のために死んだが、「私は彼女のために死ぬことができると思う」とアウグスティヌスは述べている〔『告白』〈1. 13〉〕。

しかし、このことは、今扱うべき事柄ではない。この美はどんな特権を手に入れているのか、どんな権力と支配権を有しているのか、その権力をこの上なく讃え、それに溺れた人たちは、どれほどまでに正しいと容認されるべきなのか、こういったことを疑う者は誰もいない。疑問に思うのは、ただこの美が、いかにして、いかなる手段で、この特権の結果を享受してきたのかということである。視覚作用によって、眼は魂を欺くものである、このことに関しては、眼は能動の側にも立ち、受動の側にも立つ、傷つけ傷つけられ、主体としても対象としても、特有の原因であり道具でもある。「涙として眼の中に現われ、そして胸に降りてゆく」〔セネカ〈正しくはプブリリウス・シュルス『格言集』40〉〕。眼が美の光線を心に運ぶのは、私が述べたとおりである。「私は見たとたん、いかに落ちたことか」〈ウエルギリウス『牧歌』8. 41〉、「マルスは彼女を見、眼にしたものを欲する」〔オウィディウス『祭暦』〈3. 21〉〕。シケムはレアの娘デナを眼にして、凌辱し〔『創世記』34. 2〕、「美しく麗しかったゆえに」ヤコブはラケルを辱めた〔『同』29. 17〈-18〉〕。ダビデはバト・シェバを遠くから覗き見し〔『列王紀下』〈正しくは『サムエル記下』〉11. 2〕、長老たちもスザンナを見た〔『スザンナ書』13〕ように、オルコメノスのストラトがテオパネスの娘、美しいアリストクレアがレバデアのヘルキュネの泉で水浴びするのを見て、瞬く間に虜になった〔プルタルコス〈『愛の物語』1〉〕。眼が見、炎が胸を捉えて、アムノンがタマルのゆえに病に陥った〔『サムエル記下』13. 2〕。エステルはそのあまりの美しさゆえに、アッセルスのみならず、彼女を見た者みなから好意を向けられた〔『エステル記』2. 15〕。ジェルソンやオリゲネスやその他の人たちは、キリストその人が人の子の中でも最も美しく、ヨセフがそれに続き、人の子たちよりも美しい〈ウルガタ聖書『詩篇』44. 3〉と主張する。しかもこの言葉を文字どおりに解して、キリストやヨセフはその容姿がとても美しかったので、見る人すべての人から厚情や好意を向けられた、と理解した。よく知られた註解によれば、彼を見ようと「娘たちは壁の上を渡って、また窓に向かって走り寄った」〔『創世記』49. 22への註解。典拠はおそらくモラレス『「マタイ福音書」第1章註解』〕というが、それは著名な人物が通りかかると一目見ようと我々がよくすることである。マシュー・パリスは、マティルダ王女がケルンを通り過ぎたときのことを述べている〈正しくは、フレデリック2世と結婚したイザベラ王女到着の折のこと〉。イエズス会士ペドロ・デ・モラレスは聖母マリアについて同じくらい述べ〔『「マタイ福音書」第1章註解』2. 16〕「イエスとマリアの美しさについて」、アッピアノス曰く、アントニオはクレオパトラを眼にするや恋に落ちた〔『ローマ内乱史』5. 1〕。テセウスは一目でヘレネに心奪われたあまり、もし彼女と肌を合わせることができたなら、世界中で自分ほど幸せな男はいないと思い、そのために跪いて、哀れを誘う祈りを神に捧げたのであった〔ルキアノス『カリデモス』〈16〉〕。カリ



クレスは、たまたまウエヌスが、彼女の神殿で裸身で微笑んでいる好色本の絵を見て、魂消た人のようにしばし見とれて立ちつくし、ついには、こんな情熱的な気狂いの言葉を吐いた、「嗚呼、幸運なるマルスの神よ、鎖に繋がれ、彼女ゆえに笑いものになってしまったとは」。彼は自制することができず、幾度と知れず、絵のウエヌスに接吻し、マルスと同じくらいの愛を受けたいものと求めたのであった。彼より優れた者でもそれほどまでにしなかった、どんなことをしたのか。

—— そして冗談好きの神の一人が  
無様な姿になってみたいものだと言った ——。

[オウィディウス『変身物語』第3巻〈正しくは第4巻187-88〉]

ウエヌスが初めて天に行ったとき、彼女のあまりの美しさに、(わが著作家 [ナターレ・コンティ] が『神像論』「ウエヌスについて」で] 言うには「神々がこぞって集まり彼女に挨拶した。誰もがユピテルの許に参じて彼女を自分の妻にしてくれるようにと懇願した」。美形のアウトィロクウスが現われたとき、まるで闇の中で蠟燭が彼の美しさを照らし出すように、すべての男たちの眼が「瞬時にして彼に釘づけになって、彼の姿を追い、その思いを隠すこともできず、身振りや表情で彼の姿が知れ示されたのであった」(と、クセノボンがその時の様子を『饗宴』1.9)で描いている)。聴覚や触覚といった他の感覚は、視覚より深く入り込み、影響も大きい、視覚ほど始終でなく、強烈でもない。「美しいプリセイスは戦いのただ中でアキレスの心を動かし」(ホラティウス『オード集』2.4.34に依拠)、テクメッサはアヤクスを、ユディトはかの偉大な軍将ホロフェルネスを、ダリアはサムソンを、ロザムンドはヘンリ2世を、ロクソラナはソリュマン大王の心を捉えたなどなど。

美しい女は、剣にも  
火にも勝利する。

[『アナクレオン集』「オード集」2]

美女は何ものにも打ち勝つのである。

天のもと、何ものもこれほど強くは誘わぬ、  
男の分別、心をすっかり虜にしたりはせぬ、  
美しい女のいとも甘美な餌ほどには。それは  
偉大な剛の者たちに猛々しさを抑えさせ、  
それゆえ彼らの手にはその男らしさを忘れさせる、  
心を燃やす瞳の力に突き動かされ、  
黄金の巻き毛の花に心奪われて。

瞳や巻き毛は、とろける愉悦に

残酷さに耐えるべく鍛えられた猛き心をもほどいてしまう。

[スペンサ『妖精の女王』5.8.1]

クレイトポンは、レウキッペの姿に行き逢ったとたん「心震え、その欲情誘う眼を見つめてしまった」と巧く告白している [アキレウス・タティオス『クレイトポンとレウキッペの恋の話』第1巻〈4〉]。彼は一目見るなり恋に打ちのめされて心臓が高鳴り、彼女から眼を逸らすことができなくなってしまった。ヘリオドロスにおけるカリュシリスも同様である (『エティオピア物語』第2巻)。立派な老人、イシス神の神官は嘆いている。たまたまメンフィスでかのトラキアのロドベを見かけたら眼を逸らすことができなくなった、「彼女はその存在で私を打ちのめし、私が老齢の内に保ってきた自制心を猛攻撃した。私は思慮の眼で身体の眼に長い間抵抗してきたが、ついに征服され嵐のうち私は包み隠さずに真逆さまに連れ去られたのだ」(『同書』2.25)。哲学者クセノピレスは女性に対して、長年こき下ろし、蔑み、嫌悪し、嘲笑してきたがついに美しいダブネとお供の女性たちに出くわし、(友人のダマクレトゥスに自分の不運を嘆いて言うには)、

以前には、いかなる欲望にも心動かされたことはなかった

〈プロペルティウス1.1.2〉

のに、すっかり恋に落ち、一瞬にして心を打ちのめされた。

ダブネに降参してしまったと告白する。

[アリストエネトス〈『恋愛書簡集』1.〉17]

彼女だけが私の感覚を歪めてしまい、よろめく心を

突き倒した。

[ウエルギリウス『アエネイス』4.〈22-23〉]

他にもそのような不運、いやさらなる不運を、医者ストラトクレス、あの目脂一杯(とテオドロプロドロムス『恋人たちの対話』)は描いているが、霞眼の老人は被った。彼は生涯女嫌いで、しばしば女についてひどい暴言を吐いてきた。人間の形をした蝮、毒蛇呼ばわりし、いつも女を強く否定し、行く先々で、「母親だって姉妹だって嫌悪すべし」などといったとんでもない言葉で女を馬鹿にした。もし彼の言うことを聞いたなら、その言葉のために読者のあなただって自分の母親や姉妹を毛嫌いしてしまっただろう。だが、このいかれた呆け老人も、ついに、あのいやらしい笑い方をする庭師アンティクレスの娘の、あの神々しいまでに天のものとも思われる面立ちのミュリッラに虜になった。老人はもじゃもじゃだった髭を剃り、顔に化粧し、髪を巻き毛にし、

禿げ頭を隠さんと月桂冠を被った。そして、それどころか、彼女への愛ゆえに気も狂わんばかりだった。婚姻の当日、彼は激情のあまり太陽が沈むのも待ちかね、（一日が恐ろしく、とんでもなく長くて）夜になるまでじっとしていられず、宴のご馳走もそこそこに、皆に挨拶もせず、大慌てで寝室に駆け込んだ。老人がそんな風に放縦であっては、若者たちはどう身を処すことができようか。美女、美形に決して心惑わされぬなどと誰が言えようか。自分ではできる、自分は自制するなど。否、ルキアノスは『絵画論』で自分の愛人について語る。彼女はたいそう美しいので、ただ眼にただけで、「彼女はあなたを呆けさせ、そのままあなたを殺してしまう。メドゥサのごとくあなたを石に変え、あなたは彼女から眼を逸らすことができなくなってしまい、金剛石が鉄に対してするような影響を与え」、彼女の意思にかかわらず、あなたを直ちに金縛りにし、バシリスクのようあなたに力を及ぼすのである。このことは男にも女にも起こり、デイドはアエネアスの出現に眼を奪われた。

シドンの人デイドは、一目で、我を失った。

〈ウエルギリウス『アエネイス』1.613〉

そして、[プラウトゥスも]、自分の経験から心底これが真実だと語る。

彼女を見たのち、私は、正気の人間の常ではなく、  
狂気の人間の常のように、愛してしまった。

[プラウトゥス『商人』〈262-63〉]

そのように、ミューゼウスもレアンダについて、彼女からけっして眼を逸らさなかった。そして、チャーサはパラモンについて、こう語っている。

彼はエミリーに視線を投げかけた。

そして同時に、彼は眼が眩み、「ああ」と叫んだ。

あたかも心臓を射られたかのように。

[〈チャーサ『カンタベリ物語』「騎士の物語」〈219-21〉]

もしあなたが、より詳しく、この美とは何か、それはいかなる影響を及ぼすか、それはいかに魅了するか（万人が考えているように、愛とは魅了である）を知りたいのであれば、次のように手短かに述べよう。「この顔立ちのよさ、すなわち美しさは、全体の然るべき比と各々の部分から生じる」[ピッコローミニ〈『疾病普遍哲学』〕。その正確な描写について私は、詩人たち、歴史家たち、そして愛の作家たちを参照したい。すなわち、ルキアノスの『絵画論』と『カリデモス』、クセノポンのパンテアについての描写（『キュロスの教育』5.1.48）、ペトロニウスの『カ

タレクタ』、ヘリオドロスのカリクレア、タティオスのレウキッポス、ソフィストのロンゴスのダブネとクロエ、テオドロス・プロドロムスの『ロンダテス』、アリストアエネトスとピロストラトスの書簡集、バルダッサレ・カスティリオーネの『宮廷人』第4巻、デュ・ローランの『視覚疾病、憂鬱症、カタル、加齢等に関する対話論議』第10章、エネア・シルヴィオ・ピッコロミニ〈『書簡集』114〉のルクレティア、そして完全な美を、絶対的な特徴を、男性においても女性においても、あらゆる部分を通してもっとも正確に記述した、ほとんどすべての詩人たちを、である。各々の部分は、美の完全性に一致しなければならない。というのは、セネカが『倫理書簡集』第4巻第33番において述べているように、「美しい女性とは、脚と腕だけが称讃されるのではなく、同時に顔全体が個々の部分と釣り合っているがゆえに驚嘆を与える者である」。そして、とりわけ顔は他の部分に輝きを与える。顔は、一般的に美と醜を決定し、顔は美の要塞である。他の諸部分が醜くても、良い顔が美を携えているならば（「愛されるのは妻ではなく美である」〈ユウェナリス『諷刺詩集』6.143〉）、その点がもっとも尊重され、もっぱら評価され、喜悅に猛々しく、それ自体だけで捉えることができる。

グリュケラの輝きはあなたを燃え立たせ――

優美な大胆さはあなたを燃え立たせ、

その顔を見るのはあまりに危険だ。

[ホラティウス『オード集』第1巻第19番〈5.7-8〉]

グリュケラのあまりに美しい顔は、見るにはあまりに麗しく、見る者を燃え上がらせる。カエレアが、歌っている少女の甘美な横顔を見たとき、ひどく心を動かされて、こう叫んだ。「おお、美しい顔よ。私はここで、魂からすべての女性を消え去らせる。あの日常的な美にはうんざりだ」[テレンティウス『宦官』第2幕第3場〈296-97〉]。彼が彼女を見れば見るほど、彼はよりひどくなる。――「彼女を見ると燃え上がり」〈ウエリギリウス『農耕詩』3.215〉、火を起す鏡において、太陽光線が中央に集められるように、愛の光線は彼女の両眼から投射されている。ディド女王の心を奪ったのはアエネアスの顔貌であり、彼は「顔も肩も神に似た人」〈ウエルギリウス『アエネイス』1.589〉で、天使のような顔だった。

おお、バックスとアポロンにも比する聖なる顔よ、

それを見て、男も女も無事ではすまない。

[ペトロニウス『カタレクタ』〈「愛される子どもについて」1-2〉]

この美は、大部分は、顔においてもっとも際だっているが、多くの場合に、他の部分もきわめて快い優美さをもたらすのであり、それらだけで愛を生みだすのに十分である。高い額は輝く天、天のもっとも美しい領域に似ている。

顔に誉れが住み、顔に愛が輝く。

それは磨かれたアラバスターのように白く、滑らかで、朱色の両頬に愛は宿る。「愛は少女の柔らかい頬の上で一夜を過ごす」[ソポクレス『アンティゴネ』〈782〉]。珊瑚色の唇、接吻の神殿の中では

一千の接吻が明らかにし、一千の接吻が隠す。

〈アンドレ・アルノーとピエール・ギラン『笑語集』「唇」1.6〉

三美神のもっとも優美な席（『同書』）、甘い香りを漂わせる花、そこから蜂たちは蜜を集めるのだらう。

蜜を求める鳥たちは、なぜここで白いタイムと薔薇を集めるのか。……

すべての鳥は、私の女主人の唇の上に来なさい。

それは薔薇の香りを発している。……

[チェリオ・セコンド・クリオーネ『接吻』19]

天の川なる白く円い首、顎の窪み、クピドの弓なる黒い眉、甘美な息、試供品と呼ばれる白く整った歯、そして美しく、柔らかく、丸い乳房が卓越した優雅さを与える。

パロス島産の大理石の膨らんだ両胸は、いかなる飾りであろうか。

[ジョン・リーチ〈『エピグラム集』1.18〉]

それは、二つの白墨のような丘、盛り上がった小さな胸の間に、心地よい谷を、乳の酒杯をつくり、そして、それを見ただけで、凍った恋人たちも情欲へと駆り立てられる。

彼女の胸の形は、なんと愛撫に適していたことか。

[オウィディウス〈『愛の歌』1.5.20〉]

さらに

堅く、盛りあがった胸は眼を燃やしていた。

〈ゴドフロワ『恋愛対話』「コルネリウス」〉



亜麻色の髪、金髪は常に重視された。その髪ゆえ、ウェリギリウスはデイドをこう称讃している。「プロセルピナはいまだに、彼女の金髪を切り取らなかった」〈『アエネイス』4. 698〉。そして、「髪は黄金で結いまとめられていた」〈同 4. 138〉。アポロニオス（『アルゴナウティカ』第4巻、「イアソンの金髪によってメデイアの心は燃え立った」）は、イアソンの金髪がメデイアの彼に対する盲目的愛の原因であるとしている。カストルとポルックスは、二人とも金髪だった。パリス、メネラオス、そしてもっとも愛らしい青年たちは、ジャンバティスタ・デッラ・ポルタが『人相学』第2巻で推測しているように、いつも、柔和で快活であり、見つめられていた。ホメロスはヘレネを高く称讃し、パトロクオスとアキレウスの両者とも金髪として描いている。ウェヌスは髪美しく、クビドはといえば金髪、カリストラトスによるナルキッソスの巧みな絵画のように、輝く巻き毛の金髪だった。これゆえに、プシュケは「クビドが」眠る姿を盗み見たのであり、プリセイイス、ポリュクセネなど、すべては金髪だった。

——そして、美しいヒアロウに、

若きアポロンは、その髪ゆえに言い寄った。

〈マーロウ『ヒアロウとレアング』1. 5-6〉

リーランドは、アーサー王の妻、グイテラ〔グィネヴィア〕を、彼女が美しい金髪をもつがゆえに称讃し、同様に、パウルス・アエミリウスは、フランスの美しい王、クロヴィスを称讃している。シュネシオスは、あらゆる柔弱な者と姦夫は金髪である、と主張している。そして、アプレイウスは、愛の女神であるウェヌス自身は、「三美神に伴われてやってきて、クビドの一群すべてによって付き従われ、自分自身の帯を締め、シナモンと香油の香りをさせても、もし禿げていたり、粗野な髪だったならば、彼女のウルカヌスを喜ばせることはできない」、と付け加えている。おそらく、このことのゆえに、現今のヴェネツィア婦人たちが金髪に偽装をし、また多くの女性がウェーブをかけ、細かくカールをかけ、優美さのために髪を縮らし、数多くの輪を用いて巻き髪を固定化し、自分たちの頭をспанコール、真珠、造花などで飾るのであり、また、宮廷人たちはすべて、この種の心地よい優美さに精を出すのである。簡潔に言えば、「髪はクビドの巣であり、やって来る者すべてを捕らえ、また、藪の繁った森であり、そこにクビドは自らの巣を張り、その陰のもとでは、すべての恋人たちが一千ものさまざまな仕方で興じている。

小さく柔らかな手、可愛く小さな口、小さく細く長い指、

指のかの優美さ ——

それはアポロンがダブネで讃美したもの、

手も指も褒め讃える。

〈オウィディウス『変身物語』1.500〉

すっとほっそりした身体。小さい足、そしてそれに調和のとれた脚が、素晴らしい光を放つ。「建物が基礎に依存するように、全身体はそれに依存する」[テオドレ・プロドロムス『愛の歌』第1巻]。クレアルコス、アリスタエネトス[の『恋愛書簡集』〈1.27〉]で、彼がまず最初に恋人を愛するに至るゆえとなった、彼女の最も魅力的な部分が、奇麗な脚と足であったと、友アミアンデルに誓った。柔らかくて白い肌などは特有の優美さをもち、「雲も彼女の肌ほども柔らかくなく、なんとも可愛い胸だ」[プラウトゥス『カシナ』〈847-48〉]。もっとも、こういった部分も男ではたいして愛でられることはないのだが。苦虫をかみつぶしたサラセン人でも、ときには

腕脚をむき出しにしたピュラクモンを、

〈ウェルギリウス『アエネイス』8.425〉

男では勇壮な毛むくじゃらの顔をもっとも愛でる。色の黒い男は色の白い女性の眼には真珠と映り、びっこのウルカヌスがウェヌスに受け容れられるのと同じ〈エラスムス『格言集』2.9.49参照〉。ウルカヌスは汗まみれで煤けて黒い鍛冶だったゆえウェヌスに甚く愛され、そのとき色白きアポロンや敏捷なメルクリウスは拒まれ、他の美しい面立ちの神々は棄てられた。ペトロニウスが〈『サテュリコン』126で〉述べているように、多くの女たちは「汚れた男たちに燃え」（多くの男たちが、名だたる貴婦人や都市の令嬢より、台所で働く娘たちや、貧しい物売り娘たちに心を動かされるように）、むき出しの腕や脚、ピロストラトス（子）におけるかの獵師メレゲルのような筋肉隆々たる腕などを見さえしたら、たとえ、石工やジプシー、煙突掃除人のように、全身襤褸をまとい、卑しく汚れていても、ニレオス、エベステイオン、アルキピアデス、絹や金を身に着け飾り立てた宮廷人たちといった高貴な優男より、奴隷、召使い、左官、鍛冶屋、料理人、役者に簡単に現を抜かすことになるであろう。ローマの市井人ユスティウスの妻は、役者のピュラデスに恋をして、たまたまガレノスが自ら助けなかったら、危うく狂気に陥るところだった。皇帝妃ファウステイナは剣闘士への愛に溺れた。

千人に一人ならず恋に陥り、他にもまして心を悦ばせ燃え上がらせる特別な身体の部分がある。若い哲学者の一群が、あるとき、女性のどの部分をもっとも望ましく好ましいかについて意見が食い違った。ある者は額だと言い、ある者は歯、あるいは眼、頬、唇、項、顎などと言う。その争いはコリントのライスに決定を委ねられたが、彼女は笑って言った、馬鹿の集団だ、彼らが望む箇所を彼女を自分のものにできるとしたら、最初に何処を求めるのかと。それでも私はやすやすと認める（あなた方の誰も否定しはしまいと私は思う）、どの箇所も魅惑的だが、とりわけ眼が魅惑的だと。

——（眼が星にも似て

輝くのを見た) ——

〈オウィディウス『変身物語』1.498-9〉

眼は愛の鳥刺し。「愛の鳥刺し業」[ヘインズ〈『書簡体論攷』〉]、鳥を追う喇叭、(アランドゥスの言葉を借りれば)「愛の釣り針、案内人、試金石、裁き手で、瞬時にして狂える人を癒し、健全な人を狂わせる、肉体の番人、眼に為しえないことなどあろうか」。眼が悩ませないことなどあろうか。これらはすべて真で、アテナイオス(第13巻、第5章)やタティオスも考えるように、眼は愛の座、そのことをヤン・レーンハウトは典雅なオードにおどけて表現した。

私は見た、アモルが奥方の炎と燃える  
眼の中に坐するのを。その後のことは安心してご覧あれ。  
周りにははしゃぐ兄弟たちが、  
矢と弓をもって飛びまわっていた。

[〈レーンハウト〉『端緒、接吻、眼、とその他の詩』17.〈1-4〉、

リプシウスが『書簡集』第3巻第11章で引用し、その優雅さに言及]

スカリジェ(父)はその眼を「アモル[プロペルティウス『詩集』第1巻〈1.1-2〉]の矢、舌、稲妻、また愛の乳房、天幕とも」、〈ヘインズは『ヘラクレス、汝の信念に』で、スカリジェの息子の話として〉、さらにバルダッサレ・カスティリオーネは愛の原因、戦車、灯火と呼ぶ〈『宮廷人』3〉。

—— 星と張り合う光、  
神々をも心乱させ得る光よ。

愛の弁士ペトロニウスの言葉は、

おお、心誘う眼、麗しき眼よ、  
多くを語る、そなたならではの証、  
そこにはウェヌスがいまし、軽妙なるアモルたちもそこに、  
そして、快樂そのものが真ん中に座っている。

[〈『サテュリコン』〉「カタレクタ」]

愛の灯火、起爆剤入れ、ナフサ、燐寸とティブッルスは書く、

まずは眼から神々を燃やし盡そうとするとき、  
抜け目なきアモルはふたつのランプに火をつける。

（『詩集』〈4.2.5-6〉）

レアンドロスはヘロの眼を見初めるや恋に燃えたと、ムサイオスは、[タテオスの『クレイトボンとレウキッペの恋の話』（第5巻）から「眼の輝き」のイメージを使って]言う。

と同時に、愛の松明が眼の輝きにおいて燃え盛る、  
そして、その火の攻撃に敗北した者の心も燃え上がる。  
なぜって、汚れなき女性の、世に知れた美は、  
速い矢より男たちには鋭いから。  
真に、眼は道、眼に撃たれて  
傷は心に刺し入り、男の五臓六腑に留まる。

〈『ヘロとレアンドロス』〉

当代の詩人ヤコブ・コルネリスはタマルを託つアモンを詩に描く [最後の2行はピロストラトス〈『書簡集』〉から]。

私を魅了して  
殺す、あの微笑みが、美の魅惑が、  
あの輝きが、優美さが、真の端正さが、  
赤色や、薔薇色を競いあっているあの頬が  
眼が、結ばれた黄金の髪が。

レムノスのピロストラトスは妻のバシリスクのごとき眼に声を大にして「燃える松明」と呼びかける。あの燃える二つのレンズは、彼の魂をあまりに燃やしたので、どれほどの水をもってしても消し止めることはできなかった。「これはなんたる専制王か、なんと身体の中にまで入り込んでくることか、お前は、力づくで私を曳き寄せ、飲み込む。カリユブデイスが、岩場の渦の眼で船乗りたちにするように。愛の渦の中へと落ちた者は二度とそこから出てくることはできないのだ」〔『書簡集』〕。美の最も強い光線が、いつも眼から射られる、というのを結論としよう。

というのも、これほどあまた溢れる光を、誰が  
自分の眼で見つめることができようか。  
取り乱した欲望の喘ぎゆえに、  
動揺し、震え、心定めていられずして。

[リーチ 〈『エピグラム集』〉]

千鳥を捕えるように、腕や脚を伸ばして、視線を互いに交わして、互いに誘惑する。

キュンティアは先に、彼女の眼で可哀そうに私を捕えた。

[プロペルティウス〈『詩集』〉]

あらゆる眼の中で、黒い眼が最も愛らしく、魅惑的で、美しい。ホラティウスは恋人を讃えて言う。

黒い眼と黒い髪が眼を惹いた。

(〈『詩論』37)〉)

レダは黒髪で眼を惹きつけた。

[オウィディウス『愛の歌』第2巻第4エレギア〈42〉]

それをヘシオドスは『アルクメナ』の中で讃歎している。

彼女の顔と黒い眼から

ある輝きが発する、あたかも黄金のウェヌスから発するように。

[〈偽ヘシオドス〉『ヘラクレスの盾』〈7-8〉]

そして、トリトンが『メレネ』の中で讃歎している。

私には、眼が黒く、美しい人。

[カルカニヌス『対話』]

ホメロスは、ユノを描写するさいに、「雄牛の眼をした」というエピセトを用いている [ホメロス『イリアス』1. 〈568〉]。というのは、円く黒い眼は最良のもの、美の太陽であり、黒からもっとも遠い眼はより悪いものだからである。ポリドール・ヴァージルは、我々の国民の中のそれを非難している。「英国人のほとんどは、眼が青灰色である」[『英国史』第1巻]。ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタは『人相学』第3巻〈7〉において、青灰色は子どもじみた、鈍く、暗い眼であるとして、この色を子どもたちに帰している。他方、多くの者はスペインの婦人たちを、そして、今日のギリシアの婦人たちを [ジョージ・サンディズ『旅行記』第67葉]、彼女らの眼の黒さのゆえに称讃しており、またポルタも、彼のナポリの若妻たちを称讃している。スエトニウスは、ユリウス・カエサルについて、「黒く、鮮やかで、輝く眼をもっていた」〈『ローマ皇帝伝』1. 45. 1〉と描写している。そして、アヴェロエスは『集成』の中で、このような人々は臆病であると述べているが、彼女たちがきわめて熱情的であることに疑いの余地はない。



さて、最後に、私はあなたに、いかなる手段によって美は魅了し、ある者たちが主張するように魅惑するのかを、そして、人間の魂に眼によって働きかけるのかを示すことにしよう。というのは、私は詩人の意見に与しており、愛は魅惑し、我々を不思議にも変えてしまうからである。

愛は感覚を欺き、両眼を惹きつけ、魂の  
自由を奪い、驚くべき術によって魅了する。  
私が思うに、ある悪魔が心に忍び込み、熱情を  
駆り立て、囚われた心を蝶番から引き離す。

[マントヴァのパティスタ 〈『牧歌』 1. 48-51〕

ヘリオドロスが〈『エチオピア物語』〉第3巻〈7〉で詳しく証明しているように、愛は魔法であり、「それは我々の眼、毛穴、鼻孔に入り込み、同じ性質と情感を我々の中に生じさせ、あたかもそれが出来た部分の中にあるかのようにする」。その魅惑の様態とは、フィチーノが『プラトン「饗宴」註解』第10章〈正しくは7. 10〉で明言しているように、次のようなものである。「死すべき人間たちがとくに魅惑されるのは、お互いをしばしば見つめ合うことによって、視線と視線を直接に交わし、眼と眼を結びつけるように、彼らの間で愛を飲み交わし、吸い込むときである。というのは、この病の端緒は眼だからである。そして、それゆえ、澄んだ眼の持ち主は、たとえ他の部分に欠陥があろうと、別の者をしばしば見つめることによって、この者を狂気に陥らせ、眼によって自分と彼とをしっかりと結びつける」。レオナルド・ヴァイルスが『魔法について』第1巻第2章で我々に語っているように、互いに見つめることによって、「純粋なスピリトゥスが感染させられる」。一方の者の眼は他方の者の眼を、自らから送られる光線によって貫通する。そして、多くの者がこの卓越した貫通する眼をもっており、スエトニウスがアウグストゥスについて述べているところでは〈『ローマ皇帝伝』 2. 79. 2〉、彼の眼の輝きは傑出しており、彼を観る者たちの眼をそむけさせ、彼らは太陽光線と同様に耐えることができないほどである。バッラダスは『福音書における協和と事績についての註解』第6巻第10章において、我々の救世主であるキリストについて同じことを述べており、そして、ベドロ・デ・モラレスは『『イエスとマリアの美についての書』〈『マタイ福音書』第1章註解〉において〕聖母マリアについて同じことを述べている。彼女についてニケフォルスは〈『教会史』において〉、同様に、黄色の、小麦色の髪と、しかし、何よりも愛らしく、貫通する眼をもっていたと述べている。ある者が考えているように、その光線は眼から送られ、それとともにスピリトゥスの蒸気を運ぶ。そして、他の箇所を、一瞬のうちに感染させる。「視覚は内部に送られたものから生じる」と主張する人々が、この点について疑っていることは承知しているが、しかし、フィチーノはそれが霞んだ眼に由来することを証明している。「見ることだけによって、他を霞んだ眼にするもの。そして、より明白なことは、腐敗した血の蒸気はこの光線とともに入ると、この接触によって、見る者の眼は感染させられる」。別の議論は、バシリスク、すなわち、見ることによって遠くから殺すものについて

てのものであり、ピロストラトス〔『アポロニオス伝』〈4.10〉〕が語っている、あるエペソ人は、きわめて有害な眼をもっていたので、彼がしっかりと眺めた者はすべて感染した。そして、また別の議論は、アリストテレスの『問題集』で述べられている、「女性の月経」についてのもので、カポディヴァッカ〈『実践』4.1〉は「病気の月経」と付け加えている。そして、注釈家のセプタリウス〔『アリストテレス「問題集」註解』〕は、それが、眺めることによって姿見に感染すると述べている。「こうして、行為者の心臓から発せられる光線が、眼を介して、受容者のスピリトゥスを汚染し」〔カスティリオーネ『宮廷人』第3巻〕、その内部を傷つけ、したがって、スピリトゥスが血を汚染する。この効力にアプレイウス〔『変身物語』第10巻〈3〉〕のある女性が不平を漏らしている。「あなたが私の悲しみの原因です。あなたの眼は私の眼を通して私の内部に貫通し、私の臓腑を焼き尽くしました。だから、今、あなたのゆえに死なんとしている私を哀れんでください」。フィチーノ〈『プラトンの「饗宴」註解』10.3〉はこのことを、あのミリュヌス区のパイドロスとテーバイの人リュシアスという、有名な例によって描いている。「リュシアスはパイドロスの顔をじっと見つめる。そしてパイドロスは自分の眼の瞳をリュシアスの上に留める。そしてこれらの輝く光線によって、彼のスピリトゥスを送りだす。パイドロスの眼の光線は容易にリュシアスの光線と混じりあい、そしてスピリトゥスはスピリトゥスと結びつく。パイドロスの中で生まれた気体は、リュシアスの臓腑に入り込む。そしてきわめて驚くべきことに、パイドロスの血はリュシアスの心臓の中に存在している。そしてそこから、あの月並みな愛の言葉は発せられる。パイドロス、私の甘美な心よ、私の自己よ、私の愛しい臓腑よ。そして、パイドロスもまたリュシアスに向かって。おお、私の光よ、私の喜びよ、私の魂よ、私の生命よ。パイドロスはリュシアスの後を追う。というのは、リュシアスの心臓がパイドロスのスピリトゥスをもっているからである。そしてリュシアスはパイドロスの後を追う。というのは、リュシアスは自分のスピリトゥスの座を愛しているからである。両者とも後を追うが、しかし、2人の内でリュシアスの方がより熱心である。泉が川を必要とするよりも、川は泉を必要とする。鉄は磁石に触れたものによって惹き寄せられるが、さらに何かを惹き寄せることはないように、リュシアスはパイドロスを惹き寄せる。しかし、眼で見た経験のない盲人が愛するというようなことは、どうして起こりえようか」。我々は、教父たちの伝記において、荒れ野で、幼児のときから、年老いた隠修士によって育てられた子どもの物語を読む。彼が成人となったとき、偶然にも、森の中をさまよっていた二人の美しい女性を見た。彼が老人に、彼女たちはいかなる被造物であるかと問うと、老人は彼に「妖精たちだ」と答えた。そののち、たまたま話しているとき、隠修士は彼に、これまでの人生の中で見たもっとも喜ばしい光景は何かと尋ねた。彼はすぐに、彼が荒れ野で垣間見た妖精たちだ、と答えた〈フォンセカ『愛の円形闘技場』〉。こうして、疑いもなく、美しい女性の中には、ある秘密の磁石が、磁力が、生得の影響力が存在しており、それが我々の情欲を掻きたてる。そして彼が歌っているように、

私は思う、いつか恋人をもつことを、

そして、私はいつも求める、私は愛する、誰かは知らないが。

このことは、実際、本性的な貞淑な愛については真実であるが、この英雄的愛、あるいはむしろ、我々が論じている獸的な燃えるような情欲については真実ではない。我々は、さまよう、物欲しげな、淫らな眼について語っているのであり、それは、カスティリオーネ『『宮廷人』第3巻]が述べているように、じっと待ち伏せしており、「それは多くの兵士のごとくで、眼が自らに惹きつけられた無垢な観者を見かけると、彼を射通し、すぐに彼を魅惑する。とりわけ、眼がじっと見つめて、うっとりする時はそうであり、奔放な恋人たちがお互いに働きかけ、喜びに満ちた眼によって衝突し、お互いの魂を共有するのと同様である」。したがって、あなたは、いかに容易に、しかもいかに迅速に、我々が愛へと取り去られるのかを理解するだろう。眼が輝くと、パイドロスのスピリトゥスはリュシアスの血をきわめて酷く汚染するだろう（フィチーノ『プラトン「饗宴」註解』7.4）。「そして、もし我々がペスト、疥癬、皮癬、赤痢など、いかに多くの他の病気が密かに、そして突然、伝染によって捕らわれることを考えとしても、何も驚くべきことはない」（同上）。心臓に取り入れたスピリトゥスは、それを受け容れた者を休ませてはおかず、駆り立てる。

そして、身体は、心を愛によって傷つけたものを求める。

[ルクレティウス〈『事物の本性について』4.1047]

そして、我々は明らかに、殺人者の面前で、死後に鼻から流れ出るもののようなものによって、スピリトゥスの奇妙な排出を理解することができるだろう。だが、このことについて詳しくは、レメンスの『自然の隠された神秘』第2巻第7章、ヴェルリオラの『医学的諸考察』第2巻第7章、パレスの『医学哲学論議』〈4.6〉、フィチーノ〈『プラトン「饗宴」註解』7.5〉、カルダーノ、リバウ『血まみれた屍体について』などを読みたい。

## 第2章 第2節 第3項

### 愛の人為的誘惑、愛欲への原因と挑発、 仕草、装い、寡婦産など。

生まれながらの美しさはそれ自体強力な磁石であることは、すでにお聞きになってきたとおりである。大きな誘惑で、心そのものに刺し貫いてくる。慎ましやかな乙女の美しい顔が私を傷つけた。しかし、仕草とか、衣服、宝石、化粧、装飾品といった人為的な誘惑や挑発がそこに加われば、それ以上である。時や場所など、その他の状況が合わさることもある。それぞれだけでも充分効果があるが、両者合わされば、他がなくとも申し分なく充分なくらいである。美は人為に拠るべきか自然に拠るべきかは、賢明な人たち[たとえばベイコン『随想録』]によって大いに

議論されてきた問題である。人為によるものと自然のもの、どちらがより力あるのかと [ベイコン『随想録』]。しかし、この問題はまだ決着がつかない。美はそれ自体大きな動因で、宝石が堆肥にあっても輝き光を投げかけるように、赤貧でも妙なる光を発するものだが、それは抑制されることはありえない。ヘリオドロスはカリクレアについて、彼女が掃きだめの雑草であったとしても、と書いている (『エチオピア物語』7.7)。それでも、実際に使われているように、人為的なものはさらなる力を発揮し、もっと求められるべきである。私は、この考えと同意見である。

アエグレが、金で買った骨や象牙の  
 歯をつけて自分を見せるように、  
 また、落ちる桑の実より黒い  
 リュコリスが、鉛白で化粧して自ら喜ぶように。

([マルティアリス]〈『エピグラム集』1.72.3-6〉)

『ブラジル航海記』(第8章)でのブルゴーニュ人のジャン・ドゥ・レリュも、私と同意見である。彼曰く、ブラジルに行けば、男女ともに、恥部に至るまで一糸纏わぬ生まれたままの裸で、一年も一緒に暮らした我々フランス人の、何か身に纏うべしとの説得にも応じえなかった。「我々がそんなに長い間裸身の女性とつきあっていれば、情欲を起こさせる大きな刺激になるに違いないと、多くの者が考えるだろう」、しかし、彼は結論として、そうではなく、彼女たちの裸体より我々の周りの女性の装いの方が猥褻な思いに誘うものだったと書いている。「敢えて大胆にはつきり言おう」とジャン・ドゥ・レリュは言う、「フランスの女性たちの煌びやかな衣装、人工的な着色、髪飾り、巻き毛、襲付き上着、マントにガウン、豪華な胴衣、縁飾りのある緩やかな衣服、それにその他の装身具、そういったもので、わが国の女性たちは美しさを装い、丹念に自らを飾り立て、この手の点において、美しさにおいて決して劣っているわけではない未開の地の女性たちの素朴さよりずっと、不都合を醸し出しているのである。さらなる例を多く挙げて、この真実をより明らかにすることができるだろうが、同じことを考えている当時の仲間には頼むこととする」。彼の同郷人モンテーニュも『エッセー』で同意見であり、その他多くの人が同様である。こういった人たちの断言から次のように信念をもって結論づけることができる。すなわち、美は自然より人為に関わりが深く、自然が備えるようなものより外的な装飾の方が強い誘惑を醸し出すのだと。あの美しく輝く瞳、白い項、珊瑚の唇、盛り上がった乳房、蔷薇色の頬などは、それ自体強力な誘惑であるが、しかし、端正で人の手によって良く拵えられた容貌、人を悦ばせる仕草、気取った仕草が加えられると、その前よりずっと迫るものになり、またあの手の込んだ針仕事、豊かな色彩、美しい染色、宝石、スパンコール、ペンダント、薄衣、レース、紗、美しく薄い亜麻布、刺繍、巻き毛、美顔液などが施されると、もう一つの持参金となり、自然に人の技が加えられるれば、まさに女神ともなる。というのも、愛欲に誘うのは眼そのものではなく、ペテロが『ペ

テロの第二の手紙』(2.14)で言うように「淫乱な眼」、淫らな淫行を追う眼なのである。それは『イザヤ書』(3.16)で言われている、媚を送りつつゆく眼である。キリストその人も、聖母マリアも、かつていた誰よりも美しく愛すべき眼をしていたが、と同時に、いとも慎ましやかで貞潔なものだったので、その眼を見るものは誰も燃える欲情とは無縁だった、とバツラダスは言う [『福音書における協和と物語について』第1巻第1章]。ジェルソン [『処女懐胎についての説教』] やボナヴェントゥラ [『ロンバルドゥス「命題集」註解』第3巻第3部第3問題] を信じて良いなら、聖母マリアの顔ほどの、それに対する解毒剤はない。欲情をもたらすのは、眼ではなく、女性が駆使する眼の動きである。パラス（ミネルウァ）とユノとウェヌスとがリングを争ってパリスを自分のものにしようとしたとき、アプレイウスが [『変身物語』10の] 心優しい挿入譚で描いているように、ユノは堂々と、パラス（ミネルウァ）は重厚に、ウェヌスは、甘美な微笑を浮かべ、いとも典雅な美の女神たちを従えて、妙なる音楽とともに、まるで今までダンスでも踊っていたかのように、時に眼だけで踊って登場する。ここで最も重要な点は、ウェヌスの眼が踊ることであった。眼はウェヌスの求愛の仲立ちや先触れなのである。ウェヌスは現代詩人の作品においても自慢している。

すぐに私は自分の顔つきを暴君然とし、  
世界中に私の眼を讃えさせることができた。

[サミュエル・ダニエル「ロザモンドの嘆き」〈111-12〉]

眼は秘かなる雄弁家、売春宿の女将、愛の扉であり、内密の表情、瞬き、目配せや微笑など、あれこれ多くのやり取りで、幾度も、二人を合わせ、その意味を伝え、言葉を交わすまでにさせる。エウリュアロスとルクレティアは、眼でお互いに深く愛し合い、互いにもてなす準備をし、最後にあいまみえて話した。彼は眼で彼女の好意を求め、彼女は好意を返し、好もしい眼差しで彼の思いに応えた [エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ 〈『書簡集』114〉]。かのトラキア人ロドピスはこの言葉なき修辞術に大変長けていたので、「もし、彼女がただ一目誰かに眼をやったら、それだけでほとんどその男を魅惑してしまい、誰もそこから逃れることは不可能だったであろう」と作中でカラシリスは語っている [ヘリオドロス『エティオピア物語』第2巻〈25〉]。それというのも、マルセイユのサルヴィアンが述べているように、「眼は我らが魂の窓、そこを水路として通って、あらゆる不誠実な色欲が我らの心に入り込んでくる」 [『神の支配』3.37] のだから。彼らは我らが思いを暴露していて、彼らが言うように表情は魂の指標、しかし眼は表情の索引である。

何をあなたは恥知らずな眼で見るのか。

[ブキャナン 〈『十一音節詩集』4「ネアエラへ」1.25〉]



同様な微笑、振る舞い、恥部の露出、尤もらしい仕草などについて私も言うことができる。笑いは人間に固有の感情であり、微笑はよくあることである。しかし、偽で、創られ、気取られ、人的で、補完的なもの、そういった偽造の微笑は、本来の微笑よりもっと大きなことを言葉なく示し、予兆するもので、大抵の人はおびき寄せ騙すためにこれを使う。とはいえ、多くの愚かな恋する人たちはまた始終過ち、愚者の楽園に誘い込まれてしまう。というのも、もし彼らが美しい人が笑い、心嬉しい表情を見せ、何か優雅な言葉や仕草を使うのだけを見れば、それをすべて自分に当てはめて考える、すべて自分への好意からなされたもの、彼女はきっと彼らを愛していて、喜んで、すぐにでも……と。

馬鹿者が美しい娘が何かに笑いかけているのを見ると、  
愚かなことに、自分を愛そうとしていると信じ込む。

〈ハンス・ヴァルタ編『格言集』30487〉

乙女たちは愛の手管を使うのだが、それを詩人はこう歌う。

誰が信じようか。然り、乙女たちは笑う術を学び、  
笑うときの優雅さが乙女たちによって追及される。

[オウイディウス『恋愛術』〈3. 281-82〉]

笑みは他の何にもまして大きな誘惑なのである。

—— 乙女が優しく微笑んだら、  
君の心が飛び跳ねるのも当然 ——。

[ペルシウス『諷刺詩集』3. 〈110-11〉]

乙女はその心嬉しい優しい微笑みであなたの心を飛び跳ねさせる。

甘く微笑むララゲを私は愛そう、  
甘く語るララゲを。

[ホラティウス『オード集』第1巻22. 〈23-24〉]

また、ペトロニウスの『サテュリコン』で恋人について言うように、「愉しくなった彼女は笑ってはかくも私を誘惑する」。「エウスタティオスは」二度目に会ったとき、「イズメネは愛らしく微笑みかけ、イズメネオスを虜にした」と告白している。[〈『恋するイズメネとイズメネオス』第5〈正しくは4〉巻]。マントヴァのパティスタ〈『牧歌』41ff〉では、ガラの甘い微笑が羊飼いわ



ウストゥスをすっかり打ちのめした。

彼女は眼で誘って私を見つめてほほ笑んだ。

身体の他の部分の仕草も同様に影響を与える。ルキアノスでは、ダブネは、最初見知ったとき、襦袢をまとった貧しい少女だったが、今では立派になり、侍女を従え、豪華な衣装を身に着け、財布には金貨があり等々と、コルビルが言ったが、となればどうしてこうなったか知りたいだろう。「最新流行に身をやつし、誰に対しても、人好きのする身のこなしをし、愛想と甘い微笑みを振りまいた」『娼婦の対話』第4巻。多くの女性は、男性からお世辞を言われるだけで、彼への愛に溺れ、立派にふるまわれると、たちまち虜になるのであった。彼らを見つめ言い寄る軽薄で多情な求愛者たちは誰でも、すぐに彼女たちに恋し、間違いなく現を抜かし、褒め讃え、結婚までするに違いないと、信じる。それ以下のことなど思いもよらないゆえに、これが、そういう人たちの中にあつての彼の普通のふるまいであるのに、軽々しくも信じるのである。というわけで、男も女も、そういった外面で互いに騙し合うが、その他のことの中でも、高潔、端正な優美、慇懃、温かな応対、会釈、気取ったやり口、上品な歩き方や、気取った歩きぶりは、特に強力な誘惑となる。宮廷人でもあつた預言者で、優れた観察者でもあつたイザヤは、シオンの娘に「彼女たちは気取って歩き、足でりんりと鳴り響かせる」(『イザヤ書』3.16)と反意を述べる。真実を言えば、そういった手段で、結果を出せないことなどあるだろうか。

世間が称讃する若さと美しさの

極上の衣装で、彼らを自然が飾ったなら、

〈ダニエル「ロザモンドの嘆き」139-40〉

彼女は燃やす——声で、手で、歩みで、胸で、額で、眼で。

[アンゲリアーノ〈「カエリアの額」〉]

技芸が美に添えられるとき、計略と策略が重なりあうとき（というのは、いわば、愛は一種の手工品であり、まったくの曲芸であり、魅了であるのだから）、彼女たちが自らの白い手を、同時に美しい足と脚を見せるとき、バルダッサレー・カスティリオーネ〈『宮廷人』〉が第1巻で述べているように、「彼女たちは大いなる欲望を我々に置いていく」。「そして、彼女たちが自らのベチコートとドレスを持ち上げて」、いつも彼女たちがおこなっているように、自らの薄い靴下を、しかも絹製のもっとも純粋な靴下を、黄金のフリンジ、靴レース、刺繍を見せようとするとき（彼女たちが教会や、別の場所に赴かなければ、すべてを見ることはできないだろう）、それは、愚か者を捕まえようとする罠でしかない。そして、クリュソストモスが彼女たちについて率直に語っているように、「彼女たちは口では何も言わないが、自らの歩き方で語り、自らの眼で語り、自らの身体の振舞で語っている」。そして、我々は、彼女たちの頸、肩、剥き出しの胸、腕、手首が

露わにされることについて、彼女たちがそのようにする目的について、何か別様に言うことができるだろうか、ただ男性たちを欲望へと誘うためだ、と言う以外に。

それでは、なぜあなたは、乳白色の胸と  
覆いをとった乳房を見せびらかすのか。  
こう言うことだ、求めよ、求めよ、私は降参する。  
これは恋人たちを情事へと呼んでいるのだ。

[ポンターノ〈『詩集』〉第1巻「ヘルミオのために」〈7-8, 13-14〉]

ヨハン・フリードリヒ・マテンシウスが仔細に述べているように、もはや、彼女たちを注視するようにと、彼女たちの前を着飾って歩く触れ役も、音を響かせるトランペットも、あるいは、商売を知らせる雌豚の去勢人も必要ない。

注視して、注視して、そして見なさい、  
私の眼を幻惑する、  
このものが何であるのかを。  
盛装した女性が歩む、  
豪華で派手な衣服に身をつつんで、  
しかし、どこに行くのか、神は知っている。  
——注視しなさい、等々。そして、付いていく者たち。

[『古代人の贅沢と浪費について』6]

さて、それはいかなる目的と趣旨のためなのだろうか。しかし私は、これらの空想的な歓喜は脇に置いて、私の意図していた論題に取る組むことにしよう。上述したように、裸体は、それ自体では嫌悪すべきもの、愛の治療薬であるが、しかしそれが、部分的に、然るべき時に用いられるならば、これほどの強い誘惑は存在しえない。

私は帯を締めたディアナも、裸体のキュテレア [ウエヌス] も好きではない。  
前者は何も快樂をもたず、後者は過度の快樂をもつ。

[アウソニウス『エピグラム集』28〈実際は56.5-6〉]

ダピデがパテシバを盗み見たように、長老たちはスザンナを盗み見た。アペレスは、裸体のカンパスベを描こうとしたとき、彼女に恋をした [プリニウス〈『博物誌』〉第33巻第10章〈実際は35.36.86-87〉]。スエトニウス〈『ローマ皇帝伝』3〉第42章〈2〉によれば、ティベリウスはセステイウス・ガルスという「好色な老人と、裸体の少女が給仕するという条件で」夕食を取った。

ある人々はネロについて、そしてポントゥス・ヒューターはシャルル豪胆公について、多くのことを語っている。バビロニア人たちの間では、そのような姿で軽快に踊ることが、ある淫らな売春婦たちの慣習だった、とクイントゥス・クルティウスが〈『アレクサンドロス大王伝』第5巻〈1.38〉〉で述べており、またアレクサンドロ・サルディは〈『異教徒たちの慣習と祭儀について』第5巻〈1.38〉〉において他の者たちへのこの効果について書いている。トスカナ人たちは、ある所定の晩餐では、裸体の女性たちに給仕させた。そのことについて、レオニチューノは『さまざま物語について』第3巻第96章において、このような他の淫らな国民について確証している。ネロは卑猥な絵画を自らの寝室に掛けていたものだった。このことは、現代において、あまりにも普通に実行されている。そして、ヘリオガバルスは、公然と行うことによって情事へと駆り立てた。このように物事は濫用される。アリスタエネトス〔『恋愛書簡集』第2巻7〕によれば、ある主人付きの女中が、自分の主人と奥方が快樂に耽っているところを、鍵穴から盗み見て、その光景によって彼女は主人への恋に落ちた。アントニヌス・カラカッラは、自分の継母がその胸を艶めかしく露わにしているのに気づいた。彼は心をひどく動かされて言った。「ああ、私にできるなら」。その言葉を彼女はたまたま耳にして、慎みなく答えた。「あなたが好きなことを、あなたはできるのよ」〔スパルティアヌス〈『カラカッラ』10.1-2〕〕。この誘惑によって、彼は彼女と結婚した。ここでの問題は原因の中にあるのでも、事柄自体でもなく、その下品で淫らな振舞いなのである。

他のことの吟味がすべて終われば、矢が衣装から飛んでくる〈ユウェナリス『諷刺詩集』6.139参照〉、情欲への最も強烈な誘惑が衣装からやってくるのである。神は創造し、人は具体化するが、そこには情欲への誘因はない。

それは美をさらに美しくし、  
卑しい眼をもっとも魅惑する。

〔シドニ『ペンブルック伯爵夫人に捧げるアルカディア』〈2.11.137-38〉〕

卑猥な破廉恥漢、醜女の女王、せむしの屍様の男、身持ちの悪い女、魔女、腐った木偶の坊、身なり構わぬ不潔な女も、大いに着飾ったりめかしたりすれば、他の誰よりも人の心を奪うほどの美しい姿となる。かくして多くの阿呆は騙される。ある者は、**放縦の最たるもの**と呼び、ボッソは「魂の鳥狩り、致命的な鳥もち」〔〈弁論I〉「女性の虚飾に対して」〕、マテネシウスは「**血の涙を流して嘆かれるべき強い誘惑**」〔『衣服の乱用と誤用について』〕と呼ぶ。衣服の美しさが責められるべきというのではない。その他のよくある装飾についても同じである。美しさとか相應しさとかいうもの、それぞれの人が用いるに相應しく、その人の地位にも見合うものが服装にもその他のものにもあり、自分の服装の型をもっていない人はただの幻影、服装のあり方が一般的に受け入れられたものであればハラス織のタペスリの古代の似姿みたいなもの。定まらない、奇怪な、今までになかった服装をし、自分の資力、財力を超え、年齢、地位、素養、身分にも不相

応といった場合も、同様である。なぜそれほど多くの色彩の葉や造花、手の込んだ刺繍、精巧な意匠、甘い香りの香料、また、真珠、ルビー、ダイヤモンド、エメラルドなど、数えきれないほどの宝石で身を飾らねばならないのか。なぜ彼らは金や銀の冠を被るのか、宝冠や頭飾りを身に着けるのか、ペンダントやブレスレット、耳飾り、鎖飾り、ガードル、指輪、ピン、スパンコール、刺繍、ドレープ、レース襟、玉虫色のリボンで飾り立てるのか。なぜ、それほどにスカーフ、羽飾り、扇、仮面、毛皮、レース、紗、飾り襟、ラッフル、垂れ飾り、袖、カフス、ダマスク織、ベルベット、金属飾り、金銀紗で派手に目立とうとするのか。恒星であれ惑星であれ天の星々の色や、金属や石の硬質さ、芳香、さらに花、鳥、動物、魚、その他アフリカ、アジア、アメリカのもの、また海、陸のもの、人の手による技や仕事が醸し出せるものすべてで自分を引き立てようとするのか。どうしてそのような珍奇な創案をむやみに求め使うのか。そのような飾り立てた衣装を求め、計り知れない金高をそんな意匠に費やすのか。諷刺作家〔ペトロニウス〕が論じるように、「こういった巻き毛、付け毛、化粧した顔といった、気取った歩き方は、いかなる目的に一直線に至るというのか」〔『サテュリコン』126〕。どうして彼らはそれほど多くのシバリス人のごときなのか、ネロのポッパエア、アハシュエロスの愛人にも似て、カエサルが軍隊を引き連れて行ったほど、あるいは鷹の羽繕いをするときほどのお金もかけ長い時間もかけて、身を飾るのか。「身づくろいをするにも、髪を整えるにも一年かかっている」〔テレンティウス『自虐者』240〕。彼らが顔やその他の部分——例えばコルクを使って髪を整えるときか、クジラの骨で姿勢を整えるときかといったこと——に抱くほどの喜びを、「庭師は庭に、騎士は馬を装わせたり、甲冑を磨くことに抱くこともなく、それほどの手もかけず」〔ピエトロ・アルティーノ『ナンナとアントニアの話』(バルト『ポルノディダスカルス』)、水夫の船に対しても、商人の店や帳簿に対しても然りであった。そういった身の装いなど、若い男をひっかける、毎日仕掛ける雲雀取りの毘みみたいなものに過ぎないのに。アリスタエネトスの〔『恋愛書簡集』での〕優男ピロカロスが友人ピアエノスに、「まず心を捕えるのは、恋しい人のスパンコールやブレスレットの音や動きであったり、香水の香りであったりするのだから」、そのような誘惑に気をつけるようにと忠告している。

それは私の魂の零落の始まりであった。

〔オウィディウス『名婦の書簡』「メディアからイアソンへ」〈12. 32〉〕

「そんなものを集めて何になるのだ」とルキアノスは〔『愛の歌』第4巻〕で言う。「ピン、壺、グラス、香油、鋏、櫛、ヘアピン、整髪用具など何の役に立つのか、そんな馬鹿げた代物に、どうして遺産や毎年の収入をつぎ込んでしまうのか」、「両の耳にぶらさがる遺産を」〔セネカ〈『恩恵について』7. 9. 4〕、首や耳に鎖や瑠璃の宝石の代わりに竜やスズメバチや蛇を使えばいいのに、その手が鉄線で括られ、ネックレスが本当に蛇だったら、おそらくもっと良からうに。彼らの中には、癪狂院に送られ、良く扱われるとしても、鉄の鎖で縛りつけられ、扇の代わりに鞭、肌の上には刺

繡スモックの代わりに髪を衣装に、頬には化粧を塗る代わりに熱い鉄鎧で焼き印を押される（昨今わが国のイザベルごときの女性にそんな人がいたと思う）ほうが良い人たちがいる、良く扱われるとすれば。それにしても、なぜこの努力がどれもこれほど高くつくのか。準備にも、乗るのも、走るのも、行き過ぎた、高価なものを買うのか。「いかにも、それらは素晴らしくいいもので、生のままでは欠点だらけのところにも技であてがうのだから」[カスティリオーネ『宮廷人』第1巻]。

ほんとうは赤くない血色のところにも、技で赤くする。

（オウィディウス〈『恋愛術』3.200〉）

このために、彼らは顔を塗りたくり化粧する。ヘカベからヘレネを創り、〈我らは呼ぶ〉

—— 醜く不細工な娘を

エウロパと ——。

〈ユウェナリス『諷刺詩集』8.33-34〉

このために彼らは足も身体も締めつけ、ときに身を痛め苦しめすらする、またときには、上着でも袖でも100ヤードもあろうかと思うほどの緩い衣服を纏い、またときには裸体の線を露わにするほどぴったりのものを身に着けもする。あるときは長い裾を曳き、あるときは短い裾で、あるときは袖を巻き上げ、あるときは下に降ろす。あるときには襟を高くし、あるときには低くし、ときに厚い布を、ときに薄い布を用い、帯を細くしたり帯なしにもする。そうして緩やかな衣服で大きな戦車の輪のようになり、身体の線が消え、そこでゆったり服に帯をきつく締める等々。なぜこういったすべてが、[ボッソの]『箴言』〈7〉の娼婦同様、あれこれの人を酔わせるのか、それゆえ、これは眼の罨、情欲の指標と呼ばれる[スクリバニ『キリスト教哲学者』第6章]、居酒屋にとっての蔦のように、

グリケラよ、顔を塗りたくって美しくし

あなたの髪がきちんと整えられ、

指には金剛石、耳には宝石が輝いていることから、

神官ではないけれど、あなたが何を欲しいのか私には分かる。

（リーチ『エピグラム集』第4巻）

讃歎されること、見つめられること、青二才を避けることを望むのか。いつだって男たちは女性ではなく帽子や羽飾りを愛し、（[テレンティウスの『宦官』]でのカエレアが愛する女性について言う）生まれながら顔の色や、しっかりして瑞々しい身体の乙女ではなく、化粧した顔、鬘襟、美しく繊細な衣服の布、宝冠、花などを愛でる。

(彼は人為的なものを自然的なものに見なす、)

[ストロツィ 『エピグラム集』]

彼は入念につくられたチョッキに、まだら色のベチコートに、緋色に、女性自身よりも夢中になる。というのは、一般的に、彼女たちの贅沢な兎の毛皮をまとった覆いは、彼女たちの身体よりもはるかに上等だからであり、そしてシナモンの木の全体よりも好まれる樹皮のように、彼女たちの内面の才知よりも外面の服装がはるかに貴重だからである。これはきわめて一般的なことで、

我々は装飾によって魅了され、すべては宝石と黄金によって  
包まれる。乙女自身は彼女の最小の部分である。

[オウィディウス 〈『愛の治療法』 343-344』]

なぜ彼女たちは、そのように長い間、ときには冬の間じゅう閉じこもり、松明か蠟燭の光による以外には自らを見せることなく、できる限りの準備をしてから外出し、自分自身を見せることだけに意を尽くすのであろうか。

彼女たちは眺めるために来る、自分自身が眺められるために来る。

〈オウィディウス 『恋愛術』 1. 99〉

もし見られるのでなければ、何のために美はあるのか、  
もし感嘆されるのでなければ、何のために見られるのか、  
そして、感嘆されるとしても、愛において欲されるのでなければ。

[サミュエル・ダニエル 〈「ロザモンドの嘆き」 514-516〉]

なぜ彼女たちは、このような見せかけのやり方で歩むのか——ユダヤ人のピロンはそれゆえに彼女たちを非難している [『犠牲獣についての書』〈正しくは『聖具室では受け取るべきではない娼婦の報酬について』〉]——、そして、(私は再度述べるのだが)なぜ彼女たちはこのような身振りを、無分別で、滑稽で、下品な服装を、「快樂的な策略を、頬には赤を、血管には深紅を、額には白粉を、両眼には慣わしを、など」用いるのか、公の前で甘い香水、白粉、化粧クリームを用いるのか。この一群はしばしば説教を聞こうとするが、それは、信仰のゆえなのか。あるいは、バシリウス〈『説教』「酩酊と放縦について」〉が彼女たちについて語っているように、それは、彼女たちが自分の愛する者たちと会ったり、流行を見るためなのか。というのは、彼が述べているように、彼女たちは一般に、その場所にしっかり準備をして、このように入念に振る舞いながら、このような身振りや衣装でやって来るからであり、それはあたかも、教会よりもその衣装が相応しい、舞



踊学校、舞台劇、売春窟に彼女たちが行くかのごとくである。

このような一人の女性がミサを捧げに来るならば、

二十対一の確率で、彼らはすべて祈りを忘れる。

〈ドレイトン「ジョン王からマティルダへ」107-108〉

「彼女たちは、神の殉教者たちと宗教的な用途に捧げられた聖なる神殿を、傲岸さの店舗、売春婦と泥棒の巢窟、売春宿とほとんど変わらぬものにする」。我々は日々、彼女たちの夫たちが、破産者となり、寝取られ者とは言わないまでも、彼らの妻たちが尻軽な女となり、娘たちが不実な者になるのを見ており、そして、我々は日々、このような放縦な行為がおこなわれているのを耳にしているのであれば、我々は、彼女たちの目的として、若い男たちを欺き、騙すこと以外のことを考えるべきであろうか。麻くずに火がつくように、誘惑する対象がその結果を産みだすとき、いかにしてそれを変えることができるだろうか。ウェヌスがアンキセスの面前に、(ホメロスが彼の讃歌『ホメロスのウェヌス讃歌』〈81-88〉の一つで描写しているように) 豪華な外衣をまとして立ったとき、彼は即座に捉えられた。

アンキセスの前にユピテルの娘が立ったとき、彼は

彼女を見て、その美しさに驚嘆し、衣服に驚愕した。

なぜなら、彼女は炎の輝きよりも眩しい外衣をまとい、

また、燦めく鎖と、螺旋状の耳飾りをつけ、

柔らかな首には、黄金の、さまざまな方向に輝く

美しい首飾りがめぐらされていたからだ。

そして、メディアが、ニンプたちと侍女たちを伴って、イアソンの前に現われたときのことは、アポロニオスによって描写されている〔『アルゴナウティカ』第4巻〈1143-45〉〕。

実に、炎に似た輝きが、彼女たちすべてに続いていた。

黄金の房飾りから、強い光が発していた。

そして、彼の眼の中で、甘い欲望を掻き立てた。

このような話を、我々はプルタルコス〔『対比列伝』「アントニウス伝」〈26〉〕で読んでおり、ここでは、女王〈クレオパトラ〉たちがやって来て、アントニウスに自らを、「さまざまな贈り物、魅力的な装飾、アジア的な誘惑とともに、驚くべき歓喜とお祭り騒ぎとともに」差し示したとき、「彼女たちはローマ人たちをひどく誘惑したので、いかなる男も耐えることはできず、すべてが愉悦と快樂へと転じた。女性たちは自らをパッコスの姿に、男の子たちは自らをサテュルスとパ

ンに変えた。一方、アントニウス自身はクレオパトラの甘い言葉、媚薬、美しさ、魅力的な衣装にすっかり心を奪われた。というのは、彼女がキュドノス川に沿って、信じがたいほどに壮麗な、黄金を張った船に乗り、自らはウェヌスのように着飾り、侍女たちは三美神のように、小姓たちは多くのクピドのように着飾って進んでいたとき、アントニウスは驚嘆して、己れを忘れて夢中になったからである」。ヘリオドロスは〈『エティオピア物語』第1巻〈10〉〉において、クネモンの継母デマイネテに言及している。「彼女がスカーフ、指輪、外衣、冠状の頭飾りをまとった彼を見たとき、彼への愛のゆえに気を遣えた」。ホロフェルネスの眼を奪ったのは、ユデイトのスリッパだった。カルダーノは、真っ白な衣装に身を包んだ妻に初めて出会ったとき、深く讚歎し、たちまち恋に落ちた、と恥じることなく告白している [『自伝』第26章]。もし外見を飾るものがそれほどの力をもっていなかったなら、なぜナオミがルツにボアズを悦ばせる技を教えるのか [『ルツ記』3.3]。なぜユデイトはホロフェルネスを捕えようと探し、わが身を洗い甘美な香りの香油を塗り、髪を整え、豪華な衣装を身に纏うのか [『ユデイト書』10.3]。この種の放埒は過去には度を越し、髪を巻き毛にすることなく香油も振りまかないでは、誰も外に出ることはなかった。

クリスピヌスは朝早く香気を醸す、  
ふたつの葬儀のためにもなろうかというほどの。

[ユウェナリス『諷刺詩集』6〈正しくは4.108-9〉]

一人の人間が二つもの葬儀分の香を消費し尽くす、「薔薇の香りやアッシリアのナルドの香りで銀髪を香り立たせて」[ホラティウス『オード集』第2巻第11歌〈14-16〉]。何と奇妙なものをステオニウス [〈『ローマ皇帝伝』第4巻第27章] も、プリニウス (〈『博物誌』第12、13巻) も、このカリギュラの放埒の事態の中で語るのか。さらにはディオスコリデス、オルモ、ヴィラ・ノーヴァのアルナルドゥス、ギョーム・ロンドゥル (『虚飾について』) を読んでいただきたい。というのも、これは現代の技芸であり、昔年も「香油を創り出す工房がある」とセネカが記している (『倫理書簡集』90.〈19〉)。女性は悪し、男性はなお悪し。昔も今も違いはなし。セネカが嘆くことには「善き振る舞いは放縦に伴い消え失せるが、娼婦のような色彩を纏い、歩くというより、ふんぞり返り踊りながら行く。めかしこむことでは男は女を超えて、さらに歩を進める。この男が女、この女が男」 [『自然問答集』第7巻、第31章]。人というより役者、蝶、狒狒、猿、道化。さらに我々は衣装を纏ってはあまりに愚か、かける金銭はあまりに高価なるゆえ、かつてヒエロニムスが言ったように、「地所の値は一本の糸にもしかず」 (『パウロの生涯』17)、また「一枚の麻布には何十セステルスもがつぎ込まれている」 (テルトゥリアヌス『女性の習慣』)。風習を一身に纏うには、一着の衣服に何千本ものオークや何百頭もの牛をつぎ込むのは通常のことである。靴紐や、剣帯の輪紐、垂れ飾りレース、羽飾付き帽、スカーフ、帯、カフスといった小さい場所に全世襲遺産が費やされる。ヘリオバガドゥスはランプリディウスによって非難されてい

るが〈『アレクサンドル・セルウィウス』4.2〉、靴に宝石を飾っていたことで彼の時代には称讃されてもいる。尤もそれは今日では、皇帝、諸侯のみならず、侍従や隨身にも日常のことである。花、星、星座、金、宝石のすべてが、我々の靴にまで下って宝飾となっているのである。そういったローマの貴婦人たちの贅沢を抑制するためのウェアリアの法やオッピアの法、それに反対するカトの法があったが〔リウィウス〈『ローマ建国以来の歴史』第4巻4〕、どの法も今日の尊大さ、傲慢さや、この種の異常な放埒さを抑えるには役立たないであろう。もし、当代の地誌作家たちの言うことが本当なら、ルクルスの衣装棚は我々の時代の庶民に受け継がれており、ヴェネツィアの靴職人の女房、フィレンツェの愛妾も女王に少しも引けを取らないが、それだけで終わりではない。「なぜ彼らは宝石を身に着けて栄光に輝くのか、衣装の美に包まれて」歓喜し勝ち誇るのか。「男たちをやすやすと燃え上がる欲望へと誘うために、なぜ、これだけの出費をするのか。」（マッテオ・ボッソ『女性の節度なき習慣』）。かれらは品位を、美を装うが、彼らが身体を飾る間も魂を貶めたりしないように意を用いさせよ。それをクレルヴォのベルナルが「宝石で輝け、気質では悪臭を放て、赤い長衣を着よ、檻褸の良心をもて」と忠告している〔『書簡集』第113書簡〈「ソフィア嬢へ」、第3巻、17〕。彼らにはイザヤの予言に注意を払わせよ、上靴や頭飾りも、匂い玉、腕輪、耳飾り、ヴェール、鬘ヴェール、尖ったピン、ガラス細工、薄麻布、頭巾、薄紗、そして甘美な香りも取り除かれぬよう、禿髪にされ、焼き印を押され、打ち倒されぬよう〈『イザヤ書』3.16-24〕。そして娘たちには、キプリアヌスが助言するように、「あまりにしどけなく外を出歩いて、処女を喪失することにならぬよう」〈『乙女の習慣』20〕気をつけさせよ。彼らは、エジプトの神殿のように、外見は美しく見えるが、中身は腐った屍にすぎぬ。テルトゥリアヌスの次の助言に従うことが、彼らにとって、いかにはるかに良いことであろうか。「眼には貞潔を塗り、耳には神の言葉を挿し、髪にはキリストの頸木を繋いで、夫に従うべし。そうすれば、彼らは充分端正に美しく、神聖さの絹、献身のダマスク織、敬虔と貞潔の真紅の衣を身に纏うことになり、そう化粧すれば、彼らには神その人が求婚者として現われる」〔『女性の習慣』第2巻〈13.7〕。「売春婦にも蓮っ葉女にも着飾らせてみよ、鉛丹や鉛白で化粧させよ、彼らは欲情の宝石、墮落した魂の標にすぎない。もしあなたが、誠実で、高潔で、敬虔な、善き女性なら、真面目さ、慎み深さ、貞潔さをあなたの誉とし、神その人をあなたの愛と望みとしなさい」〔ボッソ〈『女性の節度なき習慣』〕。「女性は何も香料などの香りを放たないときが一番良い香りである」〔プラウトゥス〈『幽霊』273〕。乙女にも高潔な女性にも、花冠も鎖飾りも宝石もないのが、乙女の慎み、女性の貞潔さのごとき装身具なのである（ゲバラ〈『マルクス・アウレリウス伝』〕）。女性は飾りのなさと賢明な男の眼に信頼と審判を得、虚しき装飾で飾り立てている姿より美しい。飾り立てた女性たちは、肉屋の肉が串に刺されて、嵩増しされ、まるでいろいろな色の何羽ものカケスのように飾られているかのごとし。このことは、かの高潔なローマの女性、大スキピオの娘、ティトゥス・センプロニウスの妻でグラックス兄弟の母であるコルネリアについて伝えられている。たまたま、その地に不案内のカンパニア地方の女性（「五月姫のような衣装を着て、当代の多くの女性がそうであるように健康よりも頭飾りに気を揉み、櫛と鏡の間で多くの時間を過ごし、誠実で

あるより美しくありたいものと思ひ（とカトも言った）、衣装が乱れるぐらいなら国家がひっくり返った方がましだと考えている」[セネカ〈『人生の短さについて』12.3〕のような軽薄な跳ね返りの女性）と同行することになり、その女性がただただ衣装や宝石の自慢をし、そのローマの貴婦人を刺激してその衣装などを見せさせようとした。コルネリアは平静に会話を続け、子どもたちが学校から戻るとその子たちが彼女の宝石だと言って、高慢で己惚れ、根拠なく思いあがった跳ね返り女を挫き、鼻っ柱を折った。当代の女性も彼女のように振舞って、礼儀正しく、上品であれば、「黄金を黄金であるそのままに、また黄金に相応しいものにだけ用いる、という誠実な女性の姿」[ルキアノス『住居について』]に倣うなら、そして放縦で消費するより必要に応じて用いるのに倣うならどんなにか良いだろうか。ただ放縦に任せて消費するのでは、夫は乞食、自らは娼婦となり果てて、他人をも誘い込み、場合によっては魂を貶める。彼女たちの名誉や信用は、それでいかにいや増すというのか。ヒエロニムスがプレシッラ〈正しくはファビオラ〉について言うように、「彼女がいつも地味な色の服を着て、自制でもって勝利を取めたように、フリウスはガリアの人々、サムニウムのパピリウス、ヌマンティアのスキピオに勝利を取めはしなかったか」〈『書簡集』77.11〉。女性は、欲情、愚行、虚飾といった、常軌を逸した、過度の、御し難い情念を蔑み統御すべきである。

しかし、私はすっかり飽きさせていることを認める。そして、私が美しい衣服を前に大きな口を開けて立っている一方で、私の視野からこっそりと外れていたらしい、大きな別の誘惑が（少なくとも、世間の眼には）存在している。すなわち、金銭である。アモルの矢は贈り物からやって来る。金銭が結婚を成立させる。「彼らは金銭だけを見る」[アナクレオン〈『詩集』4 (29A.3)]。妻に伴う立派な婚資は、肉料理にとってのソースのようなものである。多くの男性たちは、膨大な相続分、富裕な女性相続人のことを耳にするだけで、女性たちが、あらゆる美しい装飾を、技芸と自然が提供しうる素晴らしい資質をもつ場合よりも夢中になる。彼らが気にかけているのは、誠実さ、教育、出自、美しさ、人柄ではなく、金銭である。

（おお、キュヌスよ）我々は気高い、  
 血筋の良い、犬と馬を求める。  
 一方、善き男性は、莫大な婚資を持参するならば、  
 悪しき女性を、悪しき父の娘を  
 娶ることも気につけない。

[テオグニス〈『警句集』]

もし彼女が裕福ならば、彼女は美しく、立派で、完璧で、完全なのであり、彼らは炎のごとく燃え上がり、豚とカササギのように、彼女を激しく愛し、彼女を手に入れなければ自殺してしまうほどになる。昨今では、若い男性が老いた女性と、財産のために（と言われている）結婚するほどありふれたことはない。黄金を背負った驢馬。そして、彼女が老婆で、もはや口には歯がなく、

良い家柄でもなく、整った顔をもたず、生まれつきの愚者であっても、裕福でさえあれば、即座に、求婚者として20人の若者を得るだろう。スエトニウスにおいて、彼女が述べているように、「彼らは私ではなく、私の財産を得ようとする」。彼らは彼女自身ではなく、彼女の地所や金銭を目的としている。そして、（彼は付け加えているが）もし彼女がそこにいなくなったら、素晴らしい結婚となるだろう。その逆も同様で、多くの若く、愛らしい乙女は、年取った、毫碌し、老いぼれた愚者に身を捧げるだろう。

彼が、二度目の少年期に、弱々しい口でどもっていたとしても、  
類い稀な乙女の、第一級の上品な薔薇を摘み取る。

[トマス・シャロナー『復興されたイングランド国について』第9巻]

すなわち、リューマチと痛風もちで、二十そこらの病気を抱え、おそらく一つの眼、一本の脚だけで、もはや鼻は無く、頭に髪は無く、脳に知力は無く、誠実さも無いとしても、地所と金銭をもっているならば、彼女は、他のすべての求婚者よりも彼を選ぶだろう（ペトロニウス『サテュリコン』137）。

もし裕福ならば、野蛮人も好まれるだろう。

[オウィディウス〈『恋愛術』2.276〉]

もし彼が裕福ならば、彼は男性、立派な男性、正しい男性であり、彼女は彼とともにジャカルタやティドレにも行くだらう。ゲラシムス・デ・モンテ・アウレオ、サー・ジャイルズ・グースキャップ、サー・アマラス・ラ＝フルは、彼女を手に入れるだろう。そして、アリストエネトス『『恋愛書簡集』〈1〉14』において、ピレマシオスがエンムソスに語っているように、「銀貨なしではすべてが無益であり」、金銭をもたぬ者は吊り下げよ。「資産なしに結婚について語るのは無意味であり」、このような意向で私を煩わせるな。他の者たちには望むようにさせておけ（ハンス・ヴァルタ編『格言集』23911）。「私はきっと、私を立派で華やかなままにしてくれる者を手に入れよう」。ほとんどの者は、彼女の心を自分ももっている。「性癖については、最後の問題だろう」[ユウェナリス〈『諷刺詩集』3.140-41』]。彼の性癖については、彼女は別の機会に、すなわち、すべてが終わり、結婚が成立し、全員が家に帰ったときに尋ねるだろう。ルキアノス『『娼婦の対話』第4巻』のリュキアは、正しい、若い乙女で、多くの立派な紳士が彼女の求婚者であった。エテクレスは老院議員の息子、メリッススは商人、等々。しかし、彼女は彼らすべてを捨てて、パッシオスという、さもしく、毛深く、禿げ頭の卑しい者を選んだ。なぜだろうか。「彼の父が最近死亡し、彼を唯一の相続者として、財産と地所を彼に残したからである」。このことは、魂を金銭で売ろうとする、あなた方の塵の虫や貧相な蛇の間に存在するのではなく、この餌によってあなた方は、我々のもっとも強力で、権威があり、著名な君主たちを捉えることができるだろう。



ニューバラのウィリアム〔『イングランドの事績』第3巻第14章〈実際は4.14〉〕が報告しているように、あの高慢な成金で、横柄なイーリの司教〈ロンシャンのウィリアム〉は、リチャード1世の時代に、王が不在のときに副王となり、自分自身を強化し、自分自身の偉大さを維持するために、「彼の近親者たちの婚姻によって、多くの強力で、高貴な者たちと自らを結びつけようと配慮し」、彼の貧相な親類（ノルマンディから群れをなしてやって来た）をその地の主要な貴族たちと結婚させた。そして、彼らは喜んで、美しくあろうと醜くあろうと、自分自身、息子たち、甥たちのために、こうした結婚を受け容れた。我々の著者が付け加えているように、「誰が、大きな昇進という希望の下に、輝かしい姻戚関係を望まないであろうか」。誰が金銭と昇任のために、それほどのかたことをしなかったであろうか。ブリテンの王ヴォルティゲンは、不倶戴天の敵だったサクソン公、ヘンギストの娘ロウィナと結婚したが、しかし、いかなるゆえだったのだろうか。それは、彼女の婚資としてケントの地を所有したからである。リトアニアの大公、ヤゲッロは1386年に、ヘディングに強く魅了され、その結果、彼は異教徒からキリスト教徒に転じ、ウラディスラウスの名で洗礼を受け、そして、彼の臣民はすべて、彼女のゆえに洗礼を受けたが、しかし、なぜそうなったのだろうか。それは、彼女がポーランド王の娘で相続人であり、彼の望みは二つの王国を一つに合体することだったからである。カール大帝は、女帝イレーネの最も熱心な求婚者であったが、しかし、ザナラス〔『年代記』第3巻〕が述べているように、それは「王国のために」、東の帝国を西の帝国に併合するためであった。ところで、策略によって、あるいは燃え盛る欲情によって——「彼らは恥ずべき欲情によって結びつけられた」——、金銭と財産を目的に成立した、このような結婚のすべての結末はいかなるものであろうか、何がそれに続くのであろうか。彼らは、最初はほとんど気が狂わんばかりであるが、しかし、それは単なる煌めきに過ぎず、糶穀と藁にはすぐに火がつき、しばらくの間、激しく燃え盛るが、一瞬のうちに消えるように、燃え盛る欲情の誘因によって成立する、このような結婚はすべて、同様な結果となる。そこには、誠実さ、家柄、美德、宗教、教育などの欠片もなく、欲情の炎は一瞬に内に消え去り、そして、愛の代わりに憎しみが生じる。歓喜の代わりに後悔が、そして自暴自棄が生じる。フランチェスコ・バルバロは、『結婚について』第1巻第5章において、ありふれた売春婦と恋に落ち、彼女のために気が狂わんばかりになった、パドヴァのフィリッポ某について物語っている。彼の父親は他に息子がいなかったため、彼が彼女と楽しむままにさせた。「しかし、数日後、若い男は嫌い始めて、彼女を見るのも耐えられなくなった。そして、一つの狂気から別の狂気へと落ちた」。このような出来事は、一般的に、このような恋人たちすべてに起こることであり、そうして、あるいはこのような関心にゆえに結婚する者は、メネラオスとヘレネ、ウルカヌスとウェヌス、テセウスとパエドラ、ミノスとパシパエ、クラウディウスとメッサリナ以上の結末を期待することはできない。すなわち、恥辱、悲嘆、苦悩、憂鬱、不満。

\* 太字表記は原文がラテン語、ギリシア語であることを示す。

\* 原注には、典拠の該当箇所と、テキストの引用が見出される。典拠は [ ] 内に示し、テキスト



は訳出に反映し、必要と思われる部分は [ ] に補った。

\*その他の補注や訳出の補完は 〈 〉 に示した。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes,*

*Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction

by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation*

*and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell.

London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部 第1章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収

「第1部 第1章 第2、3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008 所収

「第1部 第2章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第61号 2009 所収

「第1部 第2章 第2節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第62号 2010 所収

「第1部 第2章 第3節 第1-10項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第63号 2011 所収

「第1部 第2章 第3節 第11-14項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第64号 2012 所収

「第1部 第2章 第3節 第15節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第65号 2013 所収

「第1部 第2章 第4節 第1-6項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第66号 2014 所収

「第1部 第2章 第4節 第7項 - 第5節、第3章 第1節 第1・2項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第67号 2015 所収

「第1部 第3章 第1節 第3・4項 - 第3節、第4章」

『京都府立大学学術報告 人文』 第68号 2016 所収

「第3部 第1章 第1節 第1項序 - 第2節 第2項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第69号 2017 所収

「第3部 第1章 第2節 第3項 - 第2章 第2節 第1項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第70号 2018 所収

(2019年10月1日受理)

おかむら まきこ (文学部 共同研究員)

いとう ひろあき (専修大学 教授)